特別指定研究

擬南斉竟陵文宣王所持の「雑義記」残簡

―『敦煌秘笈』羽二七一録文研究

西域文化研究会編

主任　入澤　崇

研究員　三谷真澄

臼田淳三

はじめに

二〇一三年三月、目録冊一冊、影片冊九冊からなる『敦煌秘笈』全巻の刊行が完成された。この事業は、公益財団法人武田科学振興財団「杏雨書屋」によって二〇〇九年に始まり、本稿は、二〇一一年に刊行された『敦煌秘笈　影片冊四』（一五五―一六九頁）に掲載される「羽　271」と番号を付された写本の録文と注記を中心としている。

本写本は、大正新脩大蔵経（大正蔵）等の既存大蔵経に、収録されていない文献であり、ここに録文し紹介せんと企図したものである。

周知のごとく、敦煌写本は世界の所蔵機関に分蔵されている。近年は、国際敦煌プロジェクト（International Dunhuang Project, IDP）によって、大英図書館のスタインコレクションやフランス国立図書館のペリオコレクションをはじめ、中国国家図書館のコレクション、龍谷大学図書館の大谷コレクションなど、主要な敦煌写本がインターネット上で公開されている。

その中で、これまで、まさに秘密のベールをかぶって書庫に収められていた『秘笈』が開かれたことになり、その公開は、長く待望されてい

たものであった。これによって、古写本学や仏教学研究の発展に裨益することは言を俟たず、すでにいくつかの研究成果も公開されつつある。

目録冊冒頭の「公刊の辞」を記された吉川忠夫氏によれば、杏雨書屋には、総数七三六点の敦煌写本が蔵されているという。目録に掲載された整理番号では「七七五」が最終番号となっている。高田時雄氏によれば、この中には李盛鐸旧蔵分（四三二点）と清野謙次氏旧蔵分等を含んでいるとされる。

早くからこの写本の重要性を認識され、目録の編纂実務に尽力されたのは、本研究会研究員でもある古泉圓順氏（四天王寺大学名誉教授）である。本研究会では、影片冊が刊行され始めてから、いくつかの重要で他に類例のない写本を読解する作業を継続的に行ってきた。本稿は、その研究成果の一部である。

この写本群の来歴については、古泉圓順氏の詳しい紹介文（目録冊巻末）があるので、全文を引用しておきたい。

『敦煌秘笈』目録　書後

昭和五十五年（一九八〇）杏雨書屋の館長にご就任された羽田　明先生は、早速に『杏雨書屋蔵書目録』の編纂に着手され、同五十七年（一九八二）には完成、上梓された。丁度そのころ、私に先生からのお召しがあって参上すると、「これからは、親父（羽田　亨先生）の仕残した仕事を片づけて行こうと考えている。それは親父が係わった敦煌文書の後始末や。取り敢えず目録だけでも取りかかりたい。手伝ってくれ。」というお話であった。

羽田先生は、私が奉職する大学の長でもあったから それに従う他はない。こうして杏雨書屋所蔵敦煌文書の整理が始まった。

最初の間は先に『蔵書目録』を手がけたメンバーの方々が一緒であったが、いつか私一人がお手伝いすることになっていた。

その間に、杏雨書屋の旧舎屋が老朽化ということで改築されることになり、当時はまだ残っていた、書屋すぐ西側の武田薬品の建物の三階、館長室がその仕事場に充てられた。

「家に沢山の軸木がある。見に来てくれ。」

とのお話で羽田邸にお伺いをしたこともある。恐らく文書の一部に修復の必要があって、表装などが施されたときに、取り外された巻軸であろ

うと、推測された。摘みに塗られた漆や、軸木の材質も調べなければならない。いずれはその専門の人の手を借りなければ、との思いをした。これらの軸木は、杏雨書屋に収蔵している。

羽田先生が病魔に冒されて、富田病院で加療を続けられている間も、整理を続けたが、先生御存生の間には仕事は終わらず、ご他界の後、四十九日お逮夜の夕景、賀茂の羽田邸を訪れて、御祭壇の前に、できあがった原稿を御手向けした。「親父の仕事」を受け継いでという先生に、最終原稿のお目通しを願えなかったことは、返す返すも残念なことであった。

もともと武田薬品所有の敦煌文書は京都帝国大学本部総長室において、羽田　亨総長の下に保管されていたのであるが、太平洋戦争の激化にともない、戦火から守るために疎開することが考えられた。昭和二十年七月十三日、同十五日に二回に分けて、第一号函から第十六号函、および番外函一函、計十七函を、総長室において梱包し、同日中に大阪市東淀川区十三西之町武田薬品工業株式会社大阪工場に送られて、同工場内鉄筋コンクリート造書庫に収蔵された。

然しさらにつのる焼失の心配から、昭和二十年八月一日、兵庫県多紀郡大山村西尾新兵衛氏宅の土蔵に保管してもらうべく、これを再度移送した。

送り状の「後記」によれば、そのとき、五通の目録が作成された。四通はタイプ刷り、一通はペン書き、タイプ刷目録は、一通は住吉の武田本宅、一通は疎開先、一通は羽田総長手許、一通は予備、ペン書き一通は荷物第十六号に添付された。

またこの間に、全写本の写真も撮影されて、研究に供された。

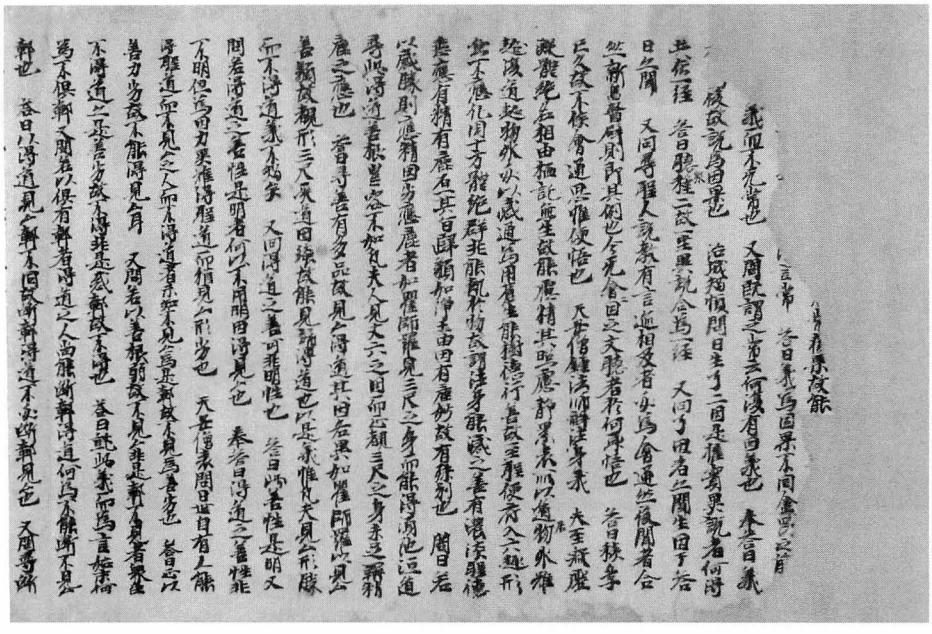
戦後、疎開先から戻された写本はいろいろな事情があったらしく、公開されることなく保管されていた。それらが杏雨書屋に寄贈されることになって、羽田　明館長が「親父の仕事」として、初めて手を染められることとなったのである。その功ならぬうちに鬼簿に御名を移されたことは先に記した通りである。

一方、全写本の写真は、敦煌文書の研究家、藤枝　晃博士に託された。しかし羽田館長亡き後、この写真は羽田邸に返還され、羽田家では羽田記念館に寄託されたと聞いている。また、羽田館長の後任として杏雨書屋館長に就任された日比野丈夫博士にあっても、その師羽田　亨総長に深く関わりを持つこれら敦煌文書の扱いには、細心の注意を払われて、これを軽々に公開することについては躊躇されていた。

斯くして今日に至ったのである。

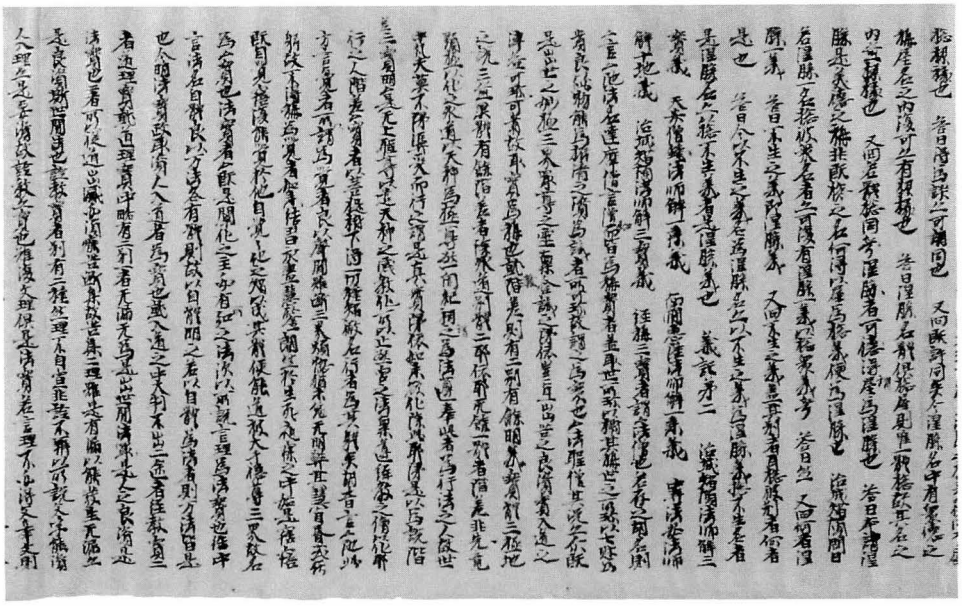
因みに、同写本の書誌データ（一五五頁）を再録すると、以下のようになる。

①番号：二七一　題名：不知題佛經義記
②原番号：二七一　原題名：残經一巻（0433）
③首題：欠
④尾題：欠
⑤用紙：縦25・5×横950・3cm
簾条数：5（cm当り）
一紙長：縦25・5×横37・3cm　紙数：27
紙質：穀紙　色：黄橡色　染：有
⑥一紙行数：26字詰め：38
界高：23cm　罫巾：0・8cm
⑦巻軸：有　巻軸長：25・7cm　径：1・5cm
⑧字体：行書
⑨体裁：巻子本
⑩同定大正No.不明・第　巻・　頁・　欄・　行-
⑪記事：
1・中題
「義記第三」、「義記第四」、「義記巻第五」トアリ。



羽271-01

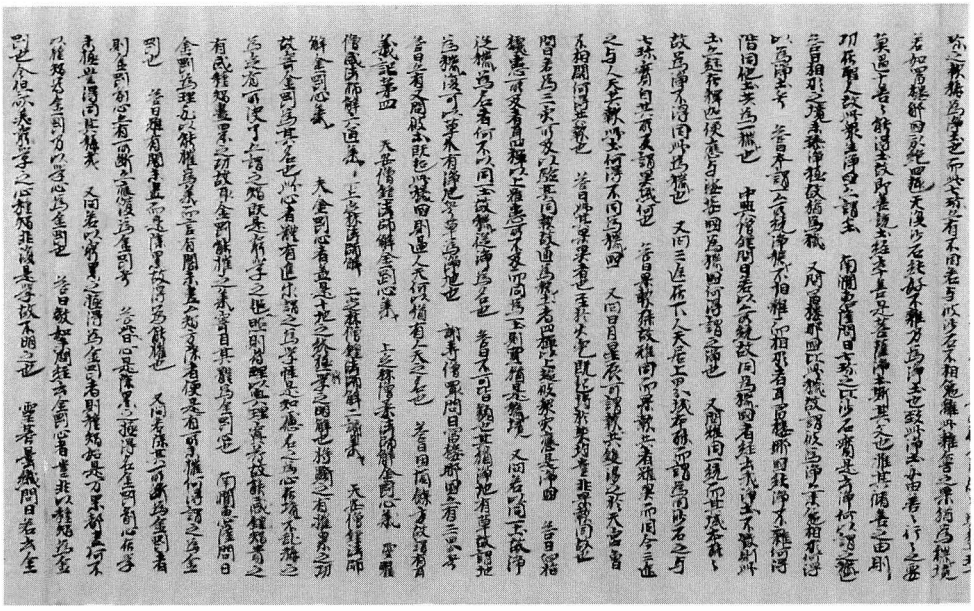
平成二十一年三月一日　古泉圓順識



羽271-06



羽271-13



羽271-20



羽271-27

2. 朱点
朱見出シ点アリ。
3. 字体
六世紀半？
4. 引用僧
引用ノ僧名ハ、殆ド、梁『高僧傳』中ニ見ユ。

本稿が成るに当たっては、本研究会研究員の臼田淳三が、写本の録文を作成し、それを古泉圓順、宇野順治、梶信隆、磯邊友美、水田恵純の研究会メンバーが議論しながらテキストを確定していくという方法がとられた。本写本中に引用される多くの仏典については、その典籍名や大正蔵の収載箇所を同定した。また、頻出する僧名についても、諸高僧伝との同定を行い、その結果を注記している。

特に、南斉時代、竟陵王の宮廷に参集していたと思われる学僧の名前が散見され、諸高僧伝に出ない逸名の学僧の思想や、当時の南朝仏教界の状況を伝える貴重な写本である。

最後に、本稿を公刊するに当たり、公益財団法人武田科学振興財団「杏雨書屋」より、研究成果公開の許可をいただいたこと、また、『敦煌秘笈』から図版の転載を許可いただいたことに対し、甚深の感謝を申し上げたい。

三谷真澄

解　題

本書は『不知題仏経義記』と記されている。巻の首尾を欠くので原題は不明であるが、巻中に義記第二・義記巻第三・義記第四・義記巻第五と記し、『義記』と題される巻子であることが知られる。そして各中題には内容についての目次が記されている。

義記第二には

「冶城智順法師解三宝義」

「天安僧鍾法師解一乗義」（注　「鍾」は「表」の誤りか）

「南澗恵隆法師解一乗義」

「中寺法安法師解十地義」

義記巻第三には

「中寺法安法師解四等義」

「祇洹恵令法師（解）四摂義」

「上定林僧柔法師解浄土義」

「白馬僧宗法師解浄土義」

義記第四には

「天安僧鍾法師解金剛心義」

「上定林僧柔法師解金剛心義」

「霊曜僧盛法師解六通義」

「下上定林法師解」（注　あやまっての記載か）

「上定林僧鍾法師解二諦義」（注　「鍾」は「柔」の誤りか）

義記巻第五には

「天安僧表法師解四諦義」
「冶城智秀法師解四諦義」
「天安僧鍾法師解三乗同観義」
「謝寺僧最法師解三乗同観義」

というように内容を記している。そして僧表法師の解四諦義の途中で切れている。

義記第一にも同様であったが首を欠き最初に何が解されていたか不明である。そして

「天安僧鍾法師解法身義」
「上定林僧集法師解法身義」
「霊基曇繊法師解涅槃義」
「南澗道祭法師解涅槃義」

が残っている。この「解〇〇義」という題のならびから、ある経典の内容を順次に解釈したものとは思えない。更に、義について述べられたあとに問答が記されている。義をたて、ついで問答の形式で述べられている書物については「義章」という名がつけられている例が多い。しかし、この写本では「義記」と名付けられている。解義を述べた人物にたいし、問答が続く。質問者の名が記され「問曰」があり、それに「答曰」と記して解義者が述べている。更に、又問・答曰というように問答が続くところは同一人の質問と言える。しかし、答の中に「奉答曰」という答え方があり、尊敬されるべき人物の質問に答えているところもある。その時の質問は「又問」(003・018・089・228・248)、あるいは「問曰」(087・225・245・546)といい、人名は記されていないのでどういう人物の問いか不明である。質問者が替わったが人物名を記すのがはばかられて「奉答曰」と記しているのかもしれない。「奉答曰」は九ヶ所にでてくる。人名は三十四名で解義者と質問者の双方をふくみ百十二回の登場を数える。

秘笈羽271にでてくる法師名一覧　【　】内は逝去の年を西暦で示す　〔　〕内に『高僧伝』その他に見られる各人の記録の記載場所を参考に記しておく。　あとの数字は人名の存する行である。　斜体は目次として記されている行を表している。

（参考）泰答曰　003　018　087　089　225　228　245　248　546

天安僧鑾法師【四八九年卒六〇才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-375-c13〕008（解法身義）　090　119　*139*　237　515［中興僧鑾］　*526*　527（解金剛心義）　*702*　712

南澗恵隆【四九〇年卒六十二才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-379-c8〕115　139　213　219　233（解一乗義）　512　531

上定林僧柔法師【四九四年卒六十四才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-378-c4〕*338*　436（解浄土義）　526　556（解金剛心義）　659（解二諦義）

白馬僧宗（崇）法師【四九六年卒五十九才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-379-c21〕*338*　507（解浄土義）

中寺法安【四九八年卒四十五才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-380-a10〕026　094　*139*　253（解十地義）　*337*　338（解四等義）　414

冶城智秀【天監之初（五〇二年～）卒六十三才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-380-c23〕042　058　130　200　575　655　671　*702*

冶城智順【五〇七年卒六十一才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-381-a27〕004　049　103　134　*138*　140（解三宝義）　358　457　567

靈味「寺」宝亮【五〇九年卒六十六才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-381-b24〕036　194　280　427　668

道林「宝誌か」【五一四年卒九十七才】〔高僧伝巻第三　大正蔵50-343-c16〕（あるいは道林僧宝）　062

靈曜僧盛【天監中（五〇二～五一九年）卒五〇余才】〔高僧伝巻第八　大正蔵50-381-a19〕376　407　*526*　584　614（解六通義）

天安智蔵【五二二年卒六十五才】〔続高僧伝巻第五　大正蔵50-465-c7〕319　466　632

道相法寵【五二四年卒七十四才】〔続高僧伝巻第五　大正蔵50-461-a16〕443

荘厳僧旻【五二七年卒六十一才】〔続高僧伝巻第五　大正蔵50-461-c23〕173

龍光寺恵生〔高僧伝巻第七　大正蔵50-367-a27〕481

皇興道明〔高僧伝巻第七　大正蔵50-374-a29〕664

荘厳玄趣〔高僧伝巻第八　大正蔵50-375-c9〕055

靈基曇鐵法師〔高僧伝巻第八　大正蔵50-375-c25〕079（解涅槃義）　123　214　250　537

天安僧表〔高僧伝巻第八　大正蔵50-375-c26〕019　125　207（解一乗義）　550　*702*　703（解四諦義）

謝寺僧最〔高僧伝巻第八　大正蔵50-375-c26〕229　524　*703*

道林僧宝〔高僧伝巻第八　大正蔵50-375-c26〕109

安楽惠令〔高僧伝巻第八　大正蔵50-380-a7〕661

荘厳法朗〔続高僧伝巻第五　大正蔵50-460-b5〕065

上定林僧集法師　033（解法身義）

荘厳惠淵　073　642

南澗道榮法師　110（解涅槃義）

荘厳法寶　184

祇洹（寺）惠令　295　*337*　400（解四braces義）　473

靈基光業　307

上定林僧栄*法師　436（解浄土義）　*「栄」は「業」の誤りか

冶城（寺）光業　390　487　597　689

上定林僧鑵法師　*527*　「鑵」は「業」の誤りか

常楽惠珍　561

中寺興慶　677

瓦官僧勗　681

この人たちの伝記より考えられることは、南斉寛陵文宣王蕭子良【四九四年卒三十四才】との関わりである。たとえば僧鑵の伝記によれば

「ゆったりと味わい深く講義を行い、聴講者は群れを成し、南斉の文恵太子と竟陵文宣王はしばしば弟子とならんことを請うた。（中略）当時、僧鍾と名声徳行が比肩した者に曇緝、曇遷、僧表、僧最、敏達、僧宝たちがおり、いずれもそれぞれ経典と論書を得意とし、そろって文宣王から敬われ、交互に講筵を開いた」（岩波文庫『高僧伝』㈢179～181頁）。智順の伝記では「南斉の竟陵文宣王はとりわけ特別に大切に扱い、彼のため冶城寺を修築して住まわせた」（同右262頁）。法安の伝記では「永明年間（四八三～四九三）に都に戻って中寺に住し、『涅槃経』、『維摩経』、『十地経』、『成実論』を講義して次から次へと途絶えることがなかった。司徒の文宣王や、張融、何胤、劉絵、劉瓛たちはそろって文章の解釈について教えを受けて心服し、ともに仏法の友となった」（同右246頁）。宝亮の伝記では「南斉の竟陵文宣王は自らわざわざ彼が住まいとするところに出かけて仏法の師匠となってくれるように要請し、宝亮はやむを得ずに赴いた。文宣王は恭しく足元に拝礼し、菩提四部因縁を結んだ」（同右266頁）。以上ようにこの義記の中で重要な位置にいる人物が文宣王と親しくしていた。この人たちを通して多くの学僧が文宣王との交わりをもったであろう。文宣王のサロンで仏教教義について論議がなされていたということは有名なはなしである。その時の議論が記録されて残されたものが、この義記の成立とかかわっていると考えられる。義記中にでる「奉答曰」は文宣王の質問に対する解答とみることができる。さらに『出三蔵記集』巻第十二には「斉太宰竟陵文宣王法集録序第二」として文宣王所持の書物の名が残されているが、その中に『雑義記』十巻　右第十帙（上）・『雑義記』十巻　右第十一帙（下）と記されている（大正蔵55-85-c20）。そのうち（上）の一部分がこの写本に当たる可能性がある。南斉時代の仏教事情を伝える貴重な文献といえる。

つぎに引用経典について述べておけば、経典名としては『勝鬘経』・『敬如来問経』・『大品』・『菩薩地持』の名が見られる。このうち『敬如来問経』は現在に伝わってなく不明である。さらに「経云」・「論云」という引用もあり、それらを大蔵経に当てれば大正蔵に見当たらない文章もあるが、上掲以外に『大般涅槃経』・『維摩詰所説経』・『仏説無上依経』・『大般涅槃経集解』・『成実論』・『小品般若経』・『坐禅三昧経』・『六十華厳経』・『過去現在因果経』・『妙法蓮華経』・『阿毘曇毘婆沙論』・『阿毘曇甘露味論』に該当した。『大般涅槃経集解』をのぞいて、いずれも南斉時代に存した典籍である。註を参照されたし。

敦煌秘笈二七一　「不知題佛経義記」録文　＊印は注あるを示す。◇印は解義の首部を示す。

001　□常在〕果。故能〔

002　□〕言常。　答曰。義為因果不同。金剛之前〔

003　〕義。而不無常也。　又問。既謂之常。云何復有因義也。　**泰答曰。義**

004　〕後。故説為因果也。　**冶城智順問曰。**生了二因。是権実異説者。何得

005　共*在一経。　答曰。聴衆種二故。一坐異説。合為一経。　又問。了因者亦聞。生因于。　答

006　曰。亦聞。　又問。尋聖人説。教有言迹相及者。必為会通。然後聞者合。

007　然新旧医辟。則即其例也。今無会二因之文。聴者於何取悟也。　答曰。積学

008　已久。故不俟会通。思惟便悟也。　◇**天安僧鍾法師解法身義。**　夫至寂虚

009　凝。体絶名相。由栖託無生。故能慮精其照。慮静累表。所以道居物外。雖

010　復道超物外。必以感通為用。蒼生能樹徳行善。故至聖便斉入六趣。形

011　無不応。化周十方。体絶群非。能軌於物故謂法。身能感之。善有濃淡。聖徳

012　垂応。有精有麁。原其旨帰。類如浄土。由因有麁妙。故有殊別也。　問曰。若

013　以感勝則応精。因劣応麁者。如瞿師羅*。見三尺之身。而能得須陀洹道。

014　尋此得道善根。豈容不如。凡夫人見。丈六之因。而正覩三尺之身。未足弁精

015　麁之応也。　答曰。尋善有多品。故見仏得道。其因各異。如瞿師羅。以見仏

善類。故覩形三尺。受道因強。故能見諦得道也。以是義惟。凡夫見仏。形勝
而不得。道義不知*矣。　又問。得道之善。可非明性也。　答曰。此善性是明。　又
問。若得道之善。性是明者。何以不用明因。得見仏也。　**奉答曰**。得道之善。性非
不明。但為因力異。雖得聖道。而猶見仏形劣也。　**天安僧表問曰**。世自有人。能
得聖道。而不見仏之人。而不得道者未知。不見仏為是障故。不見為善劣也。　答曰。正以
善力劣。故不能得見仏耳。　又問。若以善根弱。故不見仏。非是障不見者。衆生
不得道。亦是善劣故不得。非是惑障故不得也。　答曰。就此義而為言。始末何
為不俱障。　又問。若以俱有障者。得道之人。尚能断障得道。何為不能断。不見仏
障也。　答曰。以得道見仏障不同。故断障得道。不必断障見仏也。　又問。尋断
障之為法。要先麁而後細。不見仏之障応麁。得道之人。何不先断麁。後断細
□得道也。　答曰。為障種類既各異。不可得弁其先後也。　**中寺法安問曰**。当
釈氏之世。衆聖森然。為以一善感之。為各有其善也。　答曰。文殊維摩。妙本
既異。能感之善。不容一也。　又問。妙本既殊。則其善宜異者。法華分身諸仏。
便当以一善感也。　答曰。迹雖恒沙。妙本唯一。故但以一善。感彼衆形也。　又問。
善既一矣。何故感釈迦之形。四十九年。他方分身。俄傾之間也。　答曰。善有優*
劣。劣故暫覩。優則長見。　又問。優劣異矣。何謂一善也。　答曰。一人所脩。故謂一

善耳。　又問。感維摩文殊之善。亦一人所脩。何故謂之異善也。　答曰。釈迦之
与分身。同一妙本。故謂之一善。維摩文殊。妙本則異。宜言異善也。◇**上定林**
僧集法師解法身義。　夫法身虚寂。与法性塡斉。既宗極法相。故妙絶形名。
但応感相渉。則筌寄乃興何者。以体備物軌。謂之為法。円応万形。故称之曰
身。皆約迹明本。謂之法身也。　**霊味宝亮問曰**。云法身与至理。塡斉為当。
即是故塡。異而塡也。　答曰。既云塡斉。不容即是。　又問。如其有異。則
彼此之殊。同旨安寄。　答曰。為約迹語本。則義惟有異。若廃迹而言。則
無可弁異。故云塡也。　又問。若尓法身有迹。可推而立名。法性不尓。云何施称也。
答曰。法性雖無迹可求。然対有以立名也。　又問。若対有而得弁法性。則法
身亦応待生死而立号。何須尋迹。以目本也。　答曰。応接無方。是法身妙
用。今挙用以明本。亦不顕于。　**冶城智秀問曰**。如宣旨。以二義釈絶名。一以第一義
無名相。既塡此無相。故亡其照功。二以与理塡会。闇惑已尽。則無復生滅之
相。故所以絶塡源。世諦参差。則有万相之別。既鑒此殊相。便応有功。其功既有。則有相
可名也。　答曰。万有無不空。空則通於万有。万有雖殊。空性唯一。塡此空性。万相不能
隠。万相不能隠。故言無法而不照。豈実有功之可名哉。　又問。如此則聖人無心。随
境而受照。若塡空則無起動功用之可称。若鑒万有。豈不逐境而起照也。　答曰。

既塡空寂。闇惑都尽。則無起動。豈容復有隨万有而有功。政以万有不能隠。故云照万有。何得責有実功也。**冶城智順問曰**。未知所以得有実功者何。答曰。政以断除。一品之闇。故有一品之功。闇障未尽。照功未顕。闇障若断。則有照功可称。又問。若闇障未尽。照功未顕者。既塡極理。則闇障都尽。闇障都尽。所以有大功。既有大功。云何絶名。答曰。実功得顕。在于学地。由照功未足。照足則無功。無功称大功。功名所以絶。又問。答秀公云。塡一故万相不能隠。故言無理而不照。未審塡極既絶慮。云何得知。万有不隠也。答曰。就迹以尋本。既赴感未曾差。則無機而不察。無機而不察。義称為大知。**荘厳玄趣問曰**。若約迹以明本。迹即是本不。答曰。感本為迹。不異本而迹。故得為即也。又問。若不異本為迹。即本成迹也。答曰。就機見我為迹。語本未曾迹耳。又問。若語本未曾迹。便是形出於物機。豈是本也。答曰。感為本迹。故迹不異本。若発機論本。則本未曾迹也。**冶城智秀重問曰**。若就本未曾迹者。今以本而望迹。得言有此迹不。答曰。既感本為迹。則此迹是本迹。迹既是本迹。何曾不見迹。又問。既迹由感有。而感出於物。故応物見其迹。本見其感。何容本見其迹也。答曰。既許見其感。豈得無応感。応感不可無。何以不見応。**道林問曰**。若迹不異者。迹既丈六。本迹妙体。尽於丈六也。答曰。本自無形。物見故形。形既出物。何容体尽丈六哉。又問。若形出於物。則本有余也。答曰。法身

064 無定像。焉得問有余也。　又問。若無有余者。便応是定也。　答曰。以無定形。故則
065 無而不形。何得有定形也。　**莊嚴法朗問曰**。法身垂応。出自善感。未識善何以
066 義故感也。　答曰。法身虚寂。体塡法性。斯蓋是至極之善也。夫一豪之善。必塡
067 感果。以同性相感。故法身斉応。分彼長途。有極趣之義。譬銅山崩而鈴銅応。
068 又問。若以善性塡通。必相感召者。一豪微善。理必開聖。何故有善者。而不覩
069 聖応也。　答曰。非善性不塡感。但微善劣弱。感義未足。又無情願。欲見之心。
070 是故聖不応耳。　又問。若善必塡感。及其足時。能感応者。則塡感之理均便
071 応。衆聖共応也。　答曰。法身無相。妙絶言慮。豈可稍弁。其一異者哉。若語昔
072 因地修行。則前後参差。非無衆異之別。若就斯而為言。亦可云共応。若語其
073 実理則不可然。　**莊嚴惠淵問曰**。若諸同寂。故共応者。以近惟遠。理則不然。現
074 見善縁相招。則善及相値。若無縁而有感。則是無因而有果也。　答曰。此明機
075 感。非是縁感者。応則不能普。以不能普。故仰求円応之道。円応道者。体寂無
076 為。善性既均。塡感理通。塡感理通。則無極而不応。豈是無因而有果也。　又問。若
077 是機感非縁。而極聖同応者。猶有疑焉。何以言之。経云。「随所化衆生。而取仏土」。故知
078 有縁。則応有也。　答曰。此皆為見形。而不及道者。縁未物能円悟。而情有所偏。
079 故云。随所化衆生而取也。此皆欲因偏而致耳。　**◇靈基曇纖法師解涅槃義**

夫結為生源。生為苦本。如来既杜生源。又絶苦本。故体円徳備。常楽我浄。胡音謂之。
般涅槃那。涅槃那者。蓋是滅累之称也。若翻訳彼音。般涅応言不。亦言無。槃那応
言生滅。亦言去来。謂此備徳之体。永離生死。無復五道来去也。涅槃之教。有権有実。
権者仏之涅槃。身智妙存。而言滅尽。空同無物。此権教也。実者今伊字所譬。三沾妙乃此実
教也。三沾妙体者。謂智同万法。謂之般若。累無不尽。謂之解脱。応被六道。謂之法身。昔涅槃不該
身智。故謂為小。今之妙体。具此三徳。所以言大。故経云。「摩訶般涅槃」也。問曰。
昔直言涅槃。故不該身智。唯得不生不滅。今加此一大故。身智倶得者。則該与不該。義在於
大。何謂涅槃有権実二也。**奉答曰**。昔曰涅槃。実有身智。而謂為無。是以言権。今之
涅槃。則身智兼得。故謂之実也。又問。今言涅槃。若已兼得身智。何須復加大也。
奉答曰。今之涅槃。雖兼身智。而名字同昔。将有乱故加此大。使二途暁然。若其不兼。豈
得空加此大。以簡別昔教也。**天安僧鍾問曰**。経云。「所謂大者。名之曰常」。是則常義。喩
彼三事矣。何故前言。三事是衆徳之勝。故取為涅槃也。答曰。常無別体。是以遺之。
又問。身智復有別体也。答曰。義別為別体也。又問。今常義亦別。何不亦為別体于。
答曰。常義本来無体。如因地身智両殊。而無常之義斉。而已更無別法。今日之常。雖異無
常。猶亦以身智為体。常為其義也。**中寺法安問曰**。若常以無体致遺。身智以有
体故取者。何故前言。三是徳勝故。取為涅槃也。答曰。常義目以無体被遺。身智自

以徳勝故取。取捨異義。何違前言也。　又問。取捨相開。宜共其義。若常以無体被教
遺。則身智以有体故取。若身智以徳勝故取。則常義宜以徳劣被遺。豈徳被
遺由無体。彼取由徳勝故也。　答曰。取捨事殊也。故取捨之義。何為必同。既不必同故。
常以無体故去。身智以徳勝故取也。　又問。請求其例。如士以才智見擢。則不被擢
者。由於不才。豈可以被擢者由才。不被擢者乃由刑陋也。　答曰。如此以才質兼美。
所以致擢。彼人雖才。而以質陋故遺也。　又問。然則常以義偏致遺。身智以義兼
故取。方之前言。豈非相異也。　答曰。義兼。是故其本旨向為。復旨拠一事。故言
徳勝為其義耳。　**冶城智順問曰。**若謂無常。斉在衆法。故無体者。身亦寄在
五陰。何謂得独。謂有体乎。　答曰。身之為言。有通有別。説五陰為身。則身
無体。以色為身。則是其体也。　又問。然則総説身智為無常。可謂無体耳。
説身色為無常。無常亦有体。　答曰。是法各有其体。無常則義生其中。故不
得以色無常体也。　又問。今亦色心各有体。身名生於其中耳。不得言色是身体也。
答曰。妙色湛然。即是語身。故身智各異也。常無常是身智之別理。故其義生於身
智。何得均彼身智。各有別体也。　**道林僧宝問曰。**経明涅槃之大。不由相待。今何故以
相待釈大也。　答曰。夫大小得名。無不相待也。　◇**南間*道祭法師解涅槃義。**　夫生以流
動為苦。反本以寂滅為楽。楽由解。招苦由惑感。以止惑*息苦。其唯解極。解極惑尽然神

112 凝。神凝之体。称為般涅槃。般涅槃者。禹域美総之称。称美則名号兼。以加名総。故衆徳
113 斯備。該経文備。釈応云。「不生不滅。常楽我浄」也。然徳号雖衆。挙要唯三。取其惑
114 尽無累。称為解脱。応感無方。謂之法身。照窮法相。名曰般若。西域一名。総備衆名。此
115 境無言。以辞故存。彼胡音般涅槃那也。**南澗恵隆問曰**。涅槃三事。為各有其体。為但
116 有其義。　答曰。体一而義異。　又問。義異則三事是也。何者一体乎。　答曰。涅槃是備徳之
117 一名。此土既無音。以訳言一難。若得音為談者。亦是謂般若。是体亦可謂法身。解脱是
118 体。　又問。若従義説体。体則衆多矣。　答曰。既此一体。有彼三義。三即是一。一即是三。三
119 以目義。一以語体。　**天安僧鍾問曰**。若一体有三。三即是一。今挙一則通三。言三亦通一乎。
120 答曰。総可統別。別不統総也。　又問。総以別為体。故言総則兼別。今別亦体不異総。
121 言別何故不得総也。　答曰。夫総以総別。故言総以得別。別若統総。則別復是総。何謂別也。
122 又問。総義非別也。若総得兼別。何謂総別相異乎。　答曰。総義雖非別。而総以別為体。故
123 言総則通別也。　**靈基曇纖問曰**。涅槃是総徳名者。昔曰涅槃義亦照于。　答曰。然
124 問。昔曰涅槃。其徳不備。何故以備徳之名。用目之于。　答。被教既権。故以総名。目偏徳也。　問。
125 此言非偏。何以強目偏徳。而謂之権也。　答。昔有備義。隠而不弁。故謂之権也。　**天安僧表問曰**。涅槃既以
126 備徳為称。今仮名覚者。兼総衆徳。与彼涅槃。可謂同乎。　答曰。雖人法両殊。総備
127 不異也。　又問。涅槃之名。即有衆徳之称。今仮名覚者。則於衆徳之上。仮生此名。何得

128 同也。　答曰。更無別法。以之成人。人有此得。故就徳説人。何以涅槃名。有衆徳之称。人名則
129 異也。　又問。若人与涅槃兼総。復何故謂一為法。称一為人乎。　答曰。法是人之所体。人是
130 体法之者。所体名為法。能体故為人也。**冶城智秀問曰**。涅槃之総衆徳。同于屋
131 総梁椽也。　答曰。得為談亦可謂同也。　又問。既許同矣。今涅槃名中。有衆徳之
132 称。屋名之内。復可亦有梁椽也。　答曰。涅槃名体倶総。屋則唯一体総。故其名之
133 内無梁椽也。　又問。若体総同涅槃者。可得謂為涅槃也。　答曰。本謂涅
134 槃。是美徳之称。非既総之名。何得以屋為総。義便為涅槃也。**冶城智順問曰**。
135 若涅槃一名。総彼衆名者。亦可。復有涅槃一義。以総衆義乎。　答曰。然。　又問。何者涅
136 槃一義。　答曰。不生之義。即涅槃義。　又問。不生之義。蓋其別者耳。総彼別者。何者
137 是也。　答曰。今以不生之義。名為涅槃。名亦以不生之義。為涅槃義。総不生名者。
138 是涅槃名。亦以総不生義者。是涅槃義也。　義記第二　**冶城智順法師解三**
139 **宝義　天安僧鍾*法師解一乗義　南澗恵隆法師解一乗義　中寺法安法師**
140 **解十地義　◇冶城智順法師解三宝義**。　経称三宝者。謂仏法僧也。若存之胡名。則
141 仏言仏陀。法名達摩。僧言僧伽。而皆為称宝者。蓋取世所珍。以樹其称。世之所珍。以七財為
142 貴。良以此物能。為振済之資。為識者所可珍。故謂之為宝也。仏法聖僧。其況亦尓。既
143 是出世之妙極。三界最尊之霊稟。含識之帰依。豈直出苦之良資。実入道之

津益。可珍可貴。故取宝為称也。就教階差。則有二別。有余明義。宝体三極地
之説。三無異体。有余階差者。除外道別体。二耶依耶。無余一体者。階差非竟。
顕極以化之。外道以天神為極尊。然伺祀祠謂為法。遵奉此者。為行法之人。故世
中凡夫莫不帰禦。受而行之。謂是真実帰依。如来欲化。除此邪帰。是以為説。階
差三宝。明仏是無上聖尊。以遣天神之感。教化所以。止然害之。法稟遵経教之。僧以化邪
行之人。階差仏宝者。以菩提樹下。得一切種智。仮名行者。為其体矣。胡音言仏陀。此
方言覚者。所以謂為覚者。良以声聞。雖断三界煩悩。猶未免無明。弊其慧目。昏惑在
躬。故不得称為覚者。如来結習永尽。慧鑑朗然。於生死夜寐之中。始是寝寤。
既自覚寤。復能覚於他。自覚覚他之智。以成其体。便能道被大千。徳尊三界。故名
為仏宝也。法宝者。仏既是闡化之主。必有所弘之法。次以所説言理。為法宝也。経中
言。「法名自体」。良以万法各有体。則故以自体明之。若以自体為法者。則万法皆是
也。今明法宝。政取資人。入道者為宝也。就入道之中。大判不出二途。一者詮教宝。二
者道理宝。就道理宝中。略有二別。一者無漏無為。是出世間法。是人之良資。是
法宝也。二者所以従道出滅。必須厭苦断集。故苦集二理。雖是有漏。以能発生無漏。亦
是良資。斯世間法也。詮教宝者。別有二種。然理不自宣。非詮不弁。以所説文字。能資
人入理。亦是要資。故詮教亦宝也。雖復文理倶是法宝。若言理不必得文。挙文則

不遺其理。故論*云。「教化所説為法宝也」。僧宝者。胡音名僧伽。此言和合。何故
名行法人為和耶。夫心有不和。則有乖諍。故此称為其名。雖云息諍。然息諍是生
無。以入道欲学者。相与尚和息諍。故此称為其名。雖云息諍。然息諍有二事。一以教法
息諍。二以聖法息諍。教法息諍者。如戒律法制。布薩共住也。聖法息諍者。無
漏無為也。出世聖僧。倶此二法。則衆諍自息。故称為和合。階差明義。旨趣如此。
理有何闕。而須明一体也。原至極之地。凝然淇一。故三義共体。無仮実之異。而
階差体殊。宝有仮実殊。宝有仮実。則仮人異智法。仏宝来究竟。智法異仮人。法
宝亦未極。行法者為僧。未顕無学也。故三宝皆非究竟矣。以三非究竟。故須
明一体義三。而以代*之。一体義三者。真極非仮。名一為亡三也。何以然也。原覚者為用
本主乎。統化体雖非仮。然万化斯通。化通在非仮。故以通化之義。用存其体。為仏
宝也。法宝者。即覚者体。而有衆徳。若以衆徳之義。而取之明。仏即法宝
也。僧宝者。亦即覚者之体。而有至和之義。若以和義取之。則仏即僧宝也。
若如此則三而恒一。一而恒三也。三一則三無異体。一三則三義恒異。義異則三帰
之理存。体一則階差之位泯矣。**荘厳僧旻問曰。**解云。有余教明仏。二義不極。
一者仮。二者異。無余教明仏。不為因成故非仮。無仮異実故非異。若然者則。仏
無異法之義。至極仏宝。何以為体也。　答曰。覚者本以統化為能。至人体雖

176 仮。然不兼統化。若有統化。則功用猶存。以功用猶存。故得為仏宝。　又問。若
177 以統化義為仏。今不異覚義為仏也。　答曰。統化是能。故弁以明。　覚是智称。
178 不可以智為仏陀也。　又問。若仏以統化為能。覚以鑑察為義也。則両理殊致。何
179 故称為覚者也。　答曰。因覚*得有者用。故言覚也。　又問。若因覚有者。
180 則昔亦因和可得。以和義明者不。　答曰。仏能統化因智。故以覚明仏。不以和開之。
181 又問。有何異義。而不得于。　答曰。乃可　体有和義。不以和義明之。　又問。若
182 体有和義。而不以和義明。亦応体有覚教。不以覚義明。　答曰。人能弘法。
183 能由於覚。故用覚明。　又問。人能弘法。能亦由和。為以何義不得用明。　答。城如未難。
184 但以無智。則所渉皆応。有智則万化斯通。以化通在智。和豈然乎。　**荘厳法**
185 **霊問曰**。三宝。以覚以仏。和義為僧。弘闡之益。何宝用乎。　答曰。覚之能也。
186 又問。是則和益之義。唯仏独有。僧無益物。僧無益物。不得称宝也。　答曰。
187 為益不同。僧有聖徳。則物軌而行之。豈非益也。　又問。僧説法化人。是誰功也。
188 答曰。亦是僧用也。　又問。説法化人。若是僧宝。則益義同仏。向何故言異。　答曰。
189 差別三宝。則行者之功。恙是僧用。　又問。差別之仏。取者義故。至極一体。亦以　対之
190 未解。別体之僧既亦取。　至於一体。何故偏挙和合義。不以　義為僧也。　答曰。欲分
191 其義。故以仏存者。僧取和合也。　又問。別僧功能。略已可見。同体之僧。其用云何。　答

192 曰。既有至和之徳。物仙而学之。斯其用也。　又問。仙慕之義。帰於軌物。軌物是法。非僧
193 用也。　答曰。統而為語。何住非法。義為三耳。　又問。義既分三。則僧上不得。論益
194 物義也。　答曰。既已許有三。則益義各有所帰。**靈味宝亮問曰**。義云。一体三
195 宝。則為一体而有三義。未解云何。是一体而有三義也。　答曰。所云一体三義。乃是万
196 徳之一体也。　又問。今称万徳一体為是。束万為一。為是万中之一也。　答曰。一体而有万徳。
197 非束万為一。亦非万中之一也。　又問。一体者。以何為名也。　答曰。既言是万徳之体無偏。
198 当不可以偏名樹之也。　又問。若無別名者。則言語道断。心行処滅。政応置之耳。
199 豈須弁也。　答曰。既不論無相。豈得以言語道断。而為難也。　又問。若非無相。所云一
200 体。何者是也。　答曰。何異心意識。一体異名。今之所弁。義頽於此理。可明矣。　**冶城智秀**
201 **問曰**。階差中仏。以心色成之。則仏宝可見。若一体仏宝。但統王以為用者。為直以統王而為者。
202 猶以法成之也。　答曰。至人神道。円通而能弘化。即是仏宝。更無異法。所成方得為仏也。
203 問曰。至人有智。而能統化。若用智以成者。便有人法之異也。　答曰。雖説於□*無有別
204 法。可為異也。　又問。乃許別法。要云用智成。不無義為因成。　答曰。政就極体。弁有統王之徳。更不
205 立義。為因成仮也。　又問。若不許義為因成。那得有□*義。可得異法也。　答曰。以統
206 王為用。至極之仏。能有統化。則称為仏。体備万徳。則称為法。体和無諍便是僧。義是為一
207 体具三能。故指之為三宝。何得問之非仮名。便欲責之無者用也。　**◇天安僧表法師解一**

208 **乘義**　夫一乘者。蓋是衆経之玄致。諸義之要宗。能運載蒼生。道兼天下。言一乘
209 者。一行人所修万善。自為一乘也。一者無二之称。乗者運載之義。運載行人。出於生死。故名
210 一乘。乗有二種。謂因乗果乗也。因乗有二義。謂勝載進趣。果乗唯有勝載。無有進趣。
211 以仏果宗極。故無進趣。非無運動。教化衆生。但非進趣耳。因中万善。有二種義。有感仏
212 者。如十善生天報。蓋因滅不滅仏也。即此十善資生。後善相続至仏。故名感仏。一乗
213 之旨。略申如此也。　**南澗恵隆問曰**。善有向仏。不向仏者。未知何心行善。而得向仏。何者非
214 也。　答曰。衆善倶有。向仏不向仏義。更無別善。一向不向者。　**靈基曇織問曰**。有善
215 能得三界果。果尽之義。更不去者。無漏善亦得。有不去義不。　答曰。無漏善取
216 照境義。亦是不向仏之旨也。　又問。無漏善亦有。能得生死果。『勝鬘*経』云。「無漏業為因。
217 能得無明住地変苦」。此豈非能得近果義也。有漏智亦有照境義。是則二義通有。
218 何故独云。有漏善取能得報果。無漏善取能照境。此二義為不去之旨也。　答曰。
219 有漏善。無漏善。通有此二義。向之所説。正是互談一辺耳。　**恵隆問曰**。若二若倶。有
220 向仏義者。経*中何故云。「有漏善。不動不出也。」　答曰。有漏善亦有出義。以出義弱。故言不出耳。
221 又問。若有漏善。出義弱故。不名動出者。経*中何故復云。「是乗従三界出。至薩婆
222 若中住也。」　答曰。義有隠顕。故弁明不同。先言。有漏善不出者。正是逐其去力弱。目
223 為不出。今云。是乗従三界出者。此就其倶相。資至仏之理。明乗従三界出。至薩婆若住也。

問曰。若因果之善。通得為乗義者。尋法師解。乗本能以進趣為義。仏徳円極。更無所趣。何故称為乗也。**奉答曰**。云乗義有二。在果雖無進趣之能。非不有勝載之徳。此勝載之理不無。故得為乗義也。又問。乗義理応以進趣為旨。何故以勝載為義。若果用勝載為義者。如牀能勝載。応説為乗。苟有勝載所以。而不説為者何故。聖人独説。万善為乗也。如是広引事証。**奉答曰**。教旨垂責。辞切理訪。情愚慮短。更無異釈。**謝寺僧最問曰**。乗義唯在万善。其外更有別法為乗也。答曰。語於乗体。其唯万善。更無別法也。又問。若万善之外。無別法者。善所照境。得為乗不。答曰。此亦得為乗義。故経*云。「統智及智処」。倶名為般若義。可知也。又問。若以所照境。得為乗者。是則万善之外。有別法。何故言万善之外。無別法為乗也。答曰。本語乗体。故言万善之外無別法。不言乗所照。故答云無別法。◇**南澗惠隆法師解一乗義**。夫惑能染神識由苦滞。若行人之神。為惑所染。則長渉苦海。於淪生死苦。由惑得故。其惑宜断。尋惑源得尽。非万善莫能。故大聖弘化。説八万四千法門。以対治衆生。八万四千惑。若惑断由于万善。衆善便有運出之能。運出之能。称之為乗。此能運之善万殊。而所以称為一者。明一一善体。不能独運。為運之力。必由衆善。故目衆善。為仮名一。一乗之義。略解如此。**天安僧鍾問曰**。若万善其有。出徳之用。為一乗者。乗義唯一。善則万殊。此有衆一之異。是為一乗之理。応不一於衆善。答曰。乗無別運之能。正以善為体。故一一善。仮用万善。為一乗也。又問。若乗無別体故以一。一於万善者。

尋乘以運出為義。善本不以運出為旨。云何一乘。得一於衆善也。　答曰。善雖不以運出
為義。然不離不善。別有運出之能。能不離善体。故得一乎万善。為一乘也。　又問。若一一於
衆善。為一乘者。尋因地之善。無常為体。果処万善。常住為徳。既有常無常両異。豈
可共為一用也。　答曰。尋因果二善。雖常無常為異。語其運出之能無殊。故得共為
一乘也。　問曰。若収因果二善。共為一乘者。法師本以運出為乗。果善既無別趣。欲制乗義。
本在因中。不通果地也。　**奉答曰**。尋以運出為乗。果地非無此能。云何而然。若行人無
有種智。果善則不能出苦。出苦由于果善。故智果有運出之能。既倶有此能。故同得
為一乗義也。　又問。若以理推果善。応無運*出之能。何以知之。尋得果事。由金剛而得。当
知出苦之力。本在学地。豈可通果善也。　**奉答曰**。尋種智現前。非不資于金剛。然金
剛之力。不能頓傾衆惑。惑尽必待種智。既有断惑之功。当智出苦。非不由於種智。便
有運出之徳。　**霊基曇纖問曰**。若乗義在運出之窮者。解亦得窮於照一
境尽不。　答曰。不然。　又問。乗若不得因地断名者。照義亦不得。独在未窮。要在
窮理耳。　答曰。不同尋。解以了境為義。乗以出苦為旨。境有万殊。故得処処弁耳。苦無中
断之義。故乗不同制名。其在苦尽也。　**◇中寺法安法師解十地義**。　夫設名樹教。
廠趣不同。所其以広嘆極果。為生欣楽之情。是故備陳万行。為示趣果方法。十地者。即万
行之総称也。行者始終。凡有三時。自住前心。謂之凡夫。凡夫有二種。初十心以前。為外凡夫。第二十

心。為種性地。第三十心。為解行地。此二地通。為内凡夫也。登住以上。是為聖人。智周徳備。謂之極
果。就登聖上。未至極果以還。制為十地。地以能生長為義。此十階之行。能生極果故。故以言之。
夫声聞心。局禅於遠渉。故為立四果。以示其心息。大士清昿。不懼長途。故不為制果。直
弁因相。地由因也。不言十因。而言十地者。以外地体相。広大能生力。昿普載衆生。為含識
所依。内地亦然。総万行為体。是其広大。能生極果。是其力強。兼済群品。是其能載。因則
不然。故不言之也。有十階故。言有十地。何以言之。行者之惑。大判有三。一者最重。能潤悪
業。受三途之生。即経論所謂。見諦惑也。二者次重。能潤善業。能受人天之生。即経論所
謂。思惟惑也。三者最軽。能潤変易之生。即『勝*鬘経』所謂。「無明住地惑」也。対治此惑。必
資明解惑。既有三解。亦如之此解。能安前理。謂之為忍。初忍最劣。明少昧多。故奪
其見名。以忍為称。種忍者。滞師決定。未能自了之名。中忍転勝。心調順理。故以順為名。順
者。捨師従理之称也。上忍最深。心与理塡。故仍以前境為名。無生者。前境空寂之称也。
一一忍中。各為三地依忍。下品為初地。中品為二地。上品為三地。順忍下品為四地。中品
為五地。上品為六地。無生忍下品為八地。中品為九地。上品為十地。其第七一地。対治二因中間。
二因中間之惑。惑即愛楽。果地功徳之情也。治此惑地之解。謂之無生法楽忍。謂之法楽
者。従所治受名也。体深於順忍。有同於無生。故復以無生言之。此忍所以不開為三。但為一地
者。以愛法之心。本非正結。猶是前惑余引。不労多行。所以不足為三。但為一地。并前為十

272 地也。第一曰歡*喜。以初登聖境。始出凡界。恃欣所遇。故以為名。第二曰離垢。十悪垢也。大判
273 三品。初地除上。二地除中。所去已多。故受離名。第三曰明。得十二門禅。故心解慮静。心解
274 慮静。故初忍満足。心静解足。故以名為明也。第四曰炎。因前為名也。如灯燭外明不及
275 内。炎明四地之明。有咸於前。故以炎為名也。第五曰難勝。此地多通世事。医方工巧等。此等
276 是世人所知。而不及菩薩。唯六住以上。乃能勝之。故以難勝為名也。第六曰現前。此地洞解。
277 因縁之空。如在目前。故以為名也。第七曰遠行。六地終心。始出三界。未足称遠。七地之行。乃
278 合斯称。故以為名也。第八曰不動。入大寂滅。通達色難。過心意之境。絶動求之念。故以為名
279 也。第九曰善慧。通達心難。成就四弁。又無生之慧。有善於前。故以為名。第十曰法雲。恵解深明。達色心集起。
前第九曰地。謂之善恵。従内解受称。今此法
280 雲。以外益為名。外益弘昿。若雲雨之無辺。故以法雲為称也。**靈味宝亮問曰。**
281 惑心之起。為正惑一境。為通迷万法。　答曰。惑大判二種。一謂性障。一謂構起。性障者。直是
282 無明障解而已。即無明住地惑也。構起者。就此惑上。更起重惑。即四住地惑也。語無明住地。則
283 通迷万境。論四住地惑。則随心所取。如顚彼不此。則是正在一法。　又問。此二惑。為前後異起。為
284 一念備之。　答曰。一念悉有。　又問。二惑相殊。云何同在一念也。　答曰。構起之惑。必依無
285 明為根。故不相離。　又問。起必同者。亦応俱断。　答曰。構起惑無偏断之義。凡断惑者。莫
286 非見理。見理者。必除無智。故智断惑之時。亦必同去也。　又問。此之無智。既即是無明住地。便初地

之時。已断之也。　答曰。然。　又問。何故云。八地以上方断也。　答曰。得名在後也。何以言之。初地
雖已微断。少不足言。構起相麁。断義易顕。故初以断四住地為言。後方受断無明之称。
又問。経*云。「以下二智。断上上煩悩」。云何一念無漏。麁細兼除也。　答曰。伐其根本。則枝條自亡。
断惑之時。正是滅彼無智耳。無智既去。則貪嗔無所復依。故義言断之也。　又問。若根
傾則枝従者。思惟中惑。亦応俱尽。　答曰。如浪之依水而起。水眩則浪大。水夾則浪小。夾水
猶在。故不無小浪。初無漏雖漸滅。無智正可去。構起之麁者猶多。故思惟之惑。未皆去也。
又問。若以根本未尽。枝條猶起者。則金剛心時。構起方尽耳。　答曰。如彼浪依水。必在
洋溢之時。川竭池涸。雖地中余漯。不能起浪。八地以上。雖有無智。事同地漯。不復能生。構
起之惑。故金剛心時。無復可断也。　祇洹*惠令問曰。若起一念惑。惑一切法者。於第一義理。深浅
倶迷。若深浅倶迷。惑有軽重深浅不。　答曰。万惑同以不了為性。所以一念備含。何以言
之。当一念起時。無一了性。豈不是通惑万境也。　問曰。若此一念。万重必備者。亦応以一
念明心。通翻断此惑也。　答曰。亦然。仏心是也。　又問。始起無偏。何不備翻。　答曰。明力弱也。
又問。若一念明弱。不能皆翻者。一念之惑。亦応弱故。不得軽重必備。　答曰。惑不弱也。何
以言之。此明所以弱者。以所見者少。而迷者多也。一念惑中。都無微解。云何亦謂之弱也。
又問。夫神識之体。昧則称闇。明則称解。豈得一心之惑。苞備万重。一念明心。唯之一品。解惑応
等。而今大殊。求之於心。良可駭異。若然者。三途重因。亦応備苞軽業也。若謂明弱。

303 不能通翻惑者云。一念之善。消無量悪。以金畳為辟者。此何言哉。　答曰。凡夫
304 一念之惑。含万重之闇。何異仏果一念之解。苞十地之明也。初明之力。不能頓翻諸闇。亦
305 猶障金剛之闇。不能通迷衆境耳。倫例昼然。有何可異。若謂重悪必苞軽罪者。此則
306 不然。何以言之。此構起惑耳。倚伏相避。不得同時。故貪中無瞋。瞋中無貪。豈得類彼
307 性惑。同其相該也。金畳之譬。亦就此耳。故並非其証也。**靈基光泰問曰**。所言一念
308 無智。備含万重者。為同品斉類。為殊類異品也。　答曰。異品也。何以言此。一念之惑。
309 遍障十地。十地之智。既有深浅。故此惑従亦有軽重。軽重雖殊。而同在一念也。　又問。
310 殊体異念者。皆念万重也。亦有差品不同也。　答曰。念念之中。皆備万重也。　又問。
311 就皆備万重中。無復軽重也。　答曰。在凡夫則然。就聖則有漸去之義。前後有異也。　又問。
312 就聖有異為故是。凡夫之無殊者。為成聖已。後別更起也。　答曰。猶是先惑。続起至今
313 耳。但登聖則稍損其分。於万重有欠。故言異也。　又問。所謂欠者。為衆念之中。斉欠
314 其分。為令除彼念。此念猶存也。　答曰。衆念之中。同去其麁分也。　又問。夫一念癡心。
315 更無異体。若一念明解。便応含違。一念癡闇。豈得一体之中。但除其麁。不滅其細也。
316 若有麁細之殊。滅有先後者。則不得謂一体念也。　答曰。一念明解。含違癡闇者。仏心是
317 也。初無漏心。但除其麁。不及其細者。解力弱也。仏心一念。苞十地万階之解。既許之矣。何
318 故独疑。無明一念。備多重之惑也。若許初無漏心解浅。而不達深者。則亦応許。初心

319 除麁。不滅細也。　**天安智蔵問曰。**説煩悩三重。可以三忍別諸地。今遠行独立云。治
320 二因之間。若以三重惑。弁間義云何。　答曰。所謂三重。就其軽重也。此三重中。前二重同
321 是構起。倶惑三界。所以通謂穢。八地以上。構起已亡。法身自在。所以称為浄国。法愛
322 者。猶是構起之余。故障翳法身未起。故不在浄国。已免三界。故又非穢国。居浄穢之
323 中。故間義以生。然則間義。起於二国。不由於二重也。　又問。四住之極細。沙数之極麁。二
324 品相隣。差降理迮。今構起法愛。麁細云何。若同四住之細。則穢国所拘。若微於此細。
325 則無明住地摂。無明住地摂。則浄境所除。唯欲不由軽重。立法愛為中間。而軽重理迮。
326 浄穢無間。云何。　答曰。此愛由是四住之余分。構起之種類也。以其不繋三界。故非
327 穢国所摂。非穢国所摂。故居二者之間。是則唯二惑相隣。其地甚迮。以三界以穢国。則無傷
328 其中間義。　又問。蒙惑両関。而答喩者。一恐彼関未開。此亦還関何耶。既云。不繋三
329 界。便軽於四住之極細。則免此穢域。入彼浄境。豈有法愛。与恒沙煩悩同秩。而別
330 有非浄穢果也。　答曰。云離四住之極細。及免此穢域。斯則可也。便今入彼浄境。事則不
331 然。何以言之。既有余分。必須窮断。豈得踰越。便登浄境。若須識其果相。当試言
332 之。夫四住地惑。繋縛三界。若能尽之。則永入涅槃。所謂中間之惑。不能留之也。大士持以
333 慈力。以之受生。生既為物。豈得超離三界。但以因非繋法。故果亦非繋。非繋而生。故浄
334 穢所不摂耳。地*経云。「如転輪王。見諸貧苦。王雖無之。而猶是人身」。推此言之。則七地之果。

猶在三界。但以不繫。故為中間義也。難者責唯応二円。不許復中間義。故解者正存
顕中。不復備陳彼此耳。然則本自不関。何謂未開。唯欲懃事管籥。務詮開閉。而出
不由戸舎。曾不顕之。如何。　義記巻第三。　**中寺法安法師解四等義　祇洹恵**
令法師(解)四摂義　上定林僧柔法師解浄土義　白馬僧宗法師解浄土義　◇中寺法
安法師解四等義。　夫生死之苦昿矣。非勝行何以抜之。其抜苦之人。大判有二。
志小者。心存自免。情昿者。物我兼済。兼済之行。四等為最。四等者。一慈。二悲。三喜。
四捨。此四心並。怨親周普。故咸謂為等。並以無量衆生為境。故亦言無量。故経或
謂之四等。或謂四無量也。仁愛曰慈。以無楽衆生為境。仁愛既至。故情存与楽。与楽
之情。通為慈体也。愍惻曰悲。以苦悩衆生為境。愍惻既深。故情存抜苦。抜苦之情。
通為悲体也。慶悦曰喜。以前衆生得勝為境。見彼得勝。欣若在己。即此欣情。以為
喜等也。忘相曰捨。均斉怨親。離分別相。即此均情。以為捨等也。与楽者。施銭之
流也。非不抜苦。抜苦義昧。就捨昧顕。故従以与楽為名。抜苦者。除鎖執之流也。非不与楽。
与楽義弱。廃弱従強。故但以抜苦為名。語慈則浅。談悲則深。如父之於子。常
有慈愛。至子疾苦。方生悲惻。悲惻之情。能忘寝食。慈愛之心。不能如此。旦先
懐慈愛。則見苦生悲。無慈仁者。維見死不愍。推此言之。深浅可知也。喜又深悲。如人
見朋友之苦。必生愍惻。彼脱勝我。不能得無嫉。喜既難生。故為深也。捨又深喜。何以

351 言之。分別怨親。物之恒滞。未見空理。均遣実難。所以最深也。語其始習。有此難易。成
352 就之後。無次参差。何者慈。雖与上怨親楽而未均。上品是未成就也。同於至親等与勝
353 楽。乃為成就。堅固無退。乃称為大。故経*明。「大慈在初地以上」也。凡夫二乗。亦脩此行。不為
354 昡済。雖以伏瞋。瞋有四階。尤重者。能赴殺業。次者。能行楚撻。次軽者。謂之嫉妬。故経
355 論。但以為妬。不以為使也。其最軽者。即是取相。取相非瞋也。以瞋生必資取相。取相為瞋
356 之根。故相従為瞋類也。以下下善。伏上上悪。慈心最浅。故伏奪命之瞋。悲心小勝。伏鞭撻
357 怒。喜心転深。能除嫉妬。捨心最深。能除相執也。四心既成。四瞋同伏。故論亦謂之。不
358 瞋善根也。**冶城智順問曰。**此四心並得怨親。就慈等中。故兼有与楽之義。今第
359 四捨心。但為以捨怨親為境。亦有兼義也。　答曰。唯以亡怨親為境。更無兼義。　又問。
360 然則此捨。無異慈中之等。語慈則以得之矣。何須故立。第四之名也。　答曰。慈中之等。
361 唯明等与怨親之楽。而未弁等与増上。是則与少楽時。已成等義。捨則不然。必
362 須均一。故外貌似同。而其体実異也。且慈雖称等。不以縁等為情。其所縁者。唯在
363 与楽。捨則唯縁均等。不存余義。二体昇殊。云何不別立也。　又問。慈中之等。雖未能均
364 一無差。而是能等与彼楽。此心為是。存怨親所能。忘怨親所能也。　答曰。於怨起慈。
365 由於捨心所導也。　又問。若由捨故等。則応先捨後慈。云何言慈浅在前。捨深居後也。
366 答。如波若導檀。故可言波若浅檀也。　又問。六度般若。拠其深者也。　答曰。捨心亦然。

367 拠其深者。所以在後也。　又問。捨若就深。則慈亦就深。捨若就浅。慈亦就浅。括嚢言
368 之。捨未始不応在前也。　答曰。語其成就相。与無復深浅之言。本就初習。則仁惻之心易
369 生。忘怨之情難起。所以在後也。　又問。慈能等与。便是捨於不等。何故不早与捨名。捨
370 心均於怨親。此均亦是等義。何故不後与等称也。　答曰。捨等二名。貌同実殊。等以談
371 事。捨語心。若事有同等。便受等称。心忘怨親。乃得捨名。親処本宜与楽。怨処本応
372 加苦。而今乃与怨楽。則是同於所親。同於所親。則可謂之等也。雖等与楽。而怨情未遣。
373 何以言之。若不怨情。豈得但与下楽。推此言之。未尽可知矣。既云未尽。所以未受捨名。事有
374 等義。所以並得等称。　又問。亦可云。捨以談事。等以語心也。今利以捨繫心。則未見其旨。
375 答曰。何有今捨義也。二像相同。等義起也。行者先懐。怨親之心。以之為滞。今則尽之故謂
376 捨。二物称等。豈須云。申先不等也。故雖復貌同。而不橡稚也。　**靈曜僧盛問曰**。般若導
377 檀。三相倶忘。捨之導慈。何以不怨親均等。同与上楽也。　答曰。捨之有浅深。但為浅所
378 導。故未能皆与上楽。　又問。捨雖深浅。而同以忘怨親為体。怨親既忘。則応同与
379 上楽。何故猶有不同也。　答曰。捨心誠以忘怨親為情。但以脩習功浅。故臨事之時。相心還起。
380 相心還起。故不能与上楽也。　又問。相心之起。為是前相所感。為是捨心所導。　答曰。猶是前
381 相所感。亦以捨心為縁。故此心之生。欲忘而未能都尽。　又問。既云。遣相則是相心也。心無相矣。
382 何故退起相也。　答曰。此是積習。遣相不関。見理所以有退。　又問。未能見理。而云能

383 遣相者。其義云何。　答曰。観此怨過去。或是我親。不容加恨。則怨情能遣矣。無怨可
384 以異親。故澹然唯捨也。　又問。怨親中人。三境俱忘。故名捨也。今但捨一怨。二相猶存。豈得
385 称捨也。　答曰。形怨故有親也。既無怨豈有親。親怨既無。復於何弁中也。然則親与
386 中人。不待言而自障也。　又問。以捨導慈。不得平等者。般若導檀。豈得独忘相也。
387 答曰。般若是解空之智。不受不退。故相心永滅。捨是有漏信解。故不能堅固。所以猶復更
388 起也。　又問。若有漏信解。不能堅固。所以還起相心者。用此導慈。則応終不能等。
389 答曰。久習捨心。乃能平等。而不能兼退。究竟不退。必在登住。成大慈之時也。
390 **冶城光泰問曰**。慈心未成之時。雖与怨楽。未能均於所親。斯則然也。就三品怨中。亦有
391 不均于。　答曰。然。　又問。云何不均。　答曰。能与中怨上楽。而猶与重怨中楽是。　又問。
392 重怨之瞋重也。中怨之瞋軽也。今与中怨上楽。則是以伏軽瞋。已伏軽瞋。那得猶余重者也。　答曰。観
393 力未成。所以未能都尽。　又問。重怨之瞋。上上悪也。中怨之瞋。上中悪也。伏惑之体。必先
394 去上上。次遣上中。今云何先伏上中。後伏上上也。　答曰。於重怨中。与中品楽。亦是已伏麁
395 瞋。但心起依境。此怨既是起重怨地。故慈心難生。所以後方成就。　又問。中怨起
396 慈則易。重者起慈則難。難而能成。遂能与彼。与彼上楽。楽之日則応其体最深。　答曰。
397 若一境起心。義無阻障。則以易生者為浅。難起者為深。今怨親殊境。事相異途。怨処
398 則常起重瞋。以障隔慈善。慈善有障。所以難生。既生之後。適可等他。不能独深也。如於

親起慈甚易。亦不関情浅。直是心依息。起則其起難。怨則反之。所以雖復難生。不以難生為
深也。◇**祇洹恵令法師解四摂義**。夫大士懐慈悲。以昿被捴物為先。但物悟不同。受
化不一。経中明四摂。布施愛語利益同事。此是一方。制四法門。誘進矇惑。摂於始行。最
為良要。何以故然。群生多以貧窮。不能脩道。故先布施。而摂取之。一住苦言。聞必逆
耳。大士先以愛語。令物喜楽。自有衆生。応須近利益事。懐感而受化者。故菩薩先
以利益事。而摂取之也。将欲為化。若不和光。隔絶物情。故先同事。而摂取之。若以此四
門。摂来親附。然後開化出世之法。必也信。復獲是道利。此四摂従始者制名。如先為施
所摂。而来入道。雖有愛語。其余諸益。猶名布施所摂也。自其余義。類皆如此。
霊曜僧盛問曰。法施亦是。布施門摂不。答曰。若不須財等四事。直為説法。而能
受者。此人不名為摂所摂也。又問。政以聞法。而入道者。何故非摂。答曰。四摂本
為群生。信情浅薄。仮四為受法之良津。若直聞法而悟道。此自以法而蒙益。非
四摂門也。又問。経言*。「持戒摂毀禁。乃至智恵摂愚癡」。豈得非摂也。答曰。菩
薩行万行。皆為摂衆生。不言非摂義。但非四摂門也。又問。前解云。懐感而受化。
是利益門。菩薩教衆生持戒。衆生荷恩而入道。何以非也。答曰。本為衆生。不肯持
戒。四摂摂之。若直受教而持戒。荷恩而入道。此自是以持戒。而摂衆生。非四摂摂之。
中寺法安問曰。経云*。「受不殺戒。則是施彼受命。乃至受不飲酒戒。是施彼無畏」。如此之

施。是門摂不。　答曰。不摂。　又問。所以行四摂者。応在通化。故法施之時。乃是四摂之果。
非即四摂之体。斯則可也。今五戒之施。既非四摂之果。何故亦非施門所摂。　答曰。通而言
之。皆謂為摂。今此四摂。但以財施為体。戒既非財。故非施門所摂也。　又問。可得在利益
門不。　答曰。亦非也。何以言之。利益者。必就有事利彼。然後能服化。今受戒無利彼之
事。故不取之。　又問。因我受戒。故彼得無畏。又因我不受戒。彼生苦心。豈非利益事也。
答曰。万行参差。随義立称。此所謂以戒。成就*衆生也。既是戒門。不復以利益為称。
又問。利益之事。何者是也。　答曰。随能利彼。如爵位之事是。　又問。彼得官爵。故宜
是利益之体。初起身業。為彼官求之時。亦是利益事不。　答曰。是也。　又問。何向為
利益受戒。自属戒門。不開利益。今此身業。亦応別是一善。不応亦属利益也。　答曰。
為欲令彼受化。所以先須利彼。則利彼之事。非身口業。則非遂故。普利益門也。又問。
受戒者亦然也。為欲令彼服化。故先須微善之益。微善之益。非我受戒。則不生善。
今為生彼善。所以受戒。彼善既生。然後受化。考事則同矣。而云非利益何也。　答曰。亦不
異前。通菩薩行。万行皆為。利摂衆生。但法門不同。不必域使。皆是四摂門耳。**靈味寺宝亮問曰。**義云。布施為欲摂物。帰化未解利益。亦如此不。　答曰。利益亦尓。若直
布施利益。不為摂化者。則非所明也。　又問。若皆以二事故。所以得入摂門。如似軟語説法。
聞者歓喜。亦是愛*語門之所摂不。　答曰。若因愛語。而受法者。此是愛語之所摂。若

431 直楽聞法。不以因軟語故楽聞。此但是法施門耳。　又問。直以経巻施人。亦是布施門

432 不。　答曰。此是法施。非布施門也。　又問。直以経巻施人。則是紙墨而已。豈得謂法施也。

433 答曰。経巻金口所説。詮於至理。豈紙墨而已哉。本施人之意。為令読誦。故是法施也。

434 又問。播花施人。使之供養。亦是法施。　答曰。播花施人。乃是使之供養生善。但播花直

435 是財物。無所表宣。故是布施門。経巻伝金口所説。生人恵解。豈得為類乎。　◇**上定林**

436 **僧栄*法師解浄土義。**　経明浄土者。蓋是弁棲形之妙域。欲令行因以趣之。土有二種。一者。

437 大聖円応之土。二衆生共報之土。円応者。若衆生行善未純。未有浄報。而須覩応。而修行

438 者則現土而接之。維復余仏土弥布。而此封疆。乃是仏応為之。為応土也。衆生共報土

439 者。共業之所滅也。是衆生業所感。而称為仏土者。良由物稟化而致之。則土興由仏。又

440 仏昔有興土之縁。今得応居其中。為統王之主。以始末不離於仏。故言仏土也。略明報土。大判有

441 三。一稟化情薄。善悪雑受。斯土則穢也。二厭下求上。得天宮壂之処。則与穢殊域也。

442 三稟教脩空。未免於相。情無癈背。故所得之土。同在一処。而相無浄穢各別也。故経*云

443 「劫火所焼時。我浄土不毀」斯其明矣。　**道相法寵問曰。**初地菩薩。得土優劣。何如

444 二住以上也。　答曰。初二住得土一等。何以不以住高下。而土優劣。但以業是一等。故土亦等也。

445 又問。初住与二住。既有勝負之殊。何故土之与業。皆一等也。　答曰。登住以上。空理脩心。功

446 徳力大。散而不集。不復造得土之行。今所得土。是昔住下時。曾造業所感。住前業

既同。故得土一種也。　又問。此土為欲界繫非也。　答曰。亦欲界繫亦非。語其三災所及不及。
不同欲界。得報之土。而未免欲界。煩悩業所垢。故亦是欲界所摂也。　又問。已知此土。是
欲界所摂。未知菩薩。亦有色界所摂土不。　答曰。亦有也。　又問。住前所造業。得欲
界所摂土。云何復得。色界所摂土也。　答曰。此菩薩者。在外凡夫時。久遠以来。有無量色
界業。但煩悩障。故未得為用。今若欲取其。此果為化。直伏結発願。即得色界土也。
又凡夫脩七梵福。兼習定力。亦得上生也。　又問。外道謂上地。是勝浄故。伏結求地。菩
薩則不尓。但応任理以去結。今云。然伏結求上地。与外道有何異也。　答曰。菩薩為化物。故求生上地。非言為勝
浄。故上生所以。有異於外道也。　又問。五
方便。善根所感果。経*云「得色界報」今菩薩住前之業。亦宜是同。何故感欲界所
摂土也。　答曰。若任五方便。善得報応同菩薩。但得空無我解。与定理相順。又行人
有背下求上之心。所以得色界報。故経家偏明。其得色界義。不説亦能得同欲界
土。是拠其一辺耳。　**冶城智順問曰**。法師云。自得法空已来。用此解力。資於有行。不*
転勝故。感浄土者。尋土是報。法空解之力。性能刻報。云何用刻報法。資成得報之力也。
答曰。所言資者。尋空解非不刻報。但空解昧。行於十善。力未能精。籍解相道。善業
転勝。用此得為相資之力。　又問。雖云籍於空解。用資善業。尋招報之功。既力実由当
知空解。本非得報之資。　答曰。由空解未免於相。用此為資耳。　又問。若解未免

462 於相。可用為資者。便為資力在相。豈得云空解之力為資也。　答曰。非不由協相
463 故為資。但非此空解。不生勝善。故言空解得為資也。　又問。若果空解必有資
464 力者。自得真解以上。解応為資無漏。便為造生死之業。豈得言無漏不織也。
465 答曰。相似無漏。体未免報。故亦資於有漏善。得真解以上。体能散滅出観。導於有行。
466 皆亦散而不集。如苦集智等。　**天安智蔵問曰**。云報土同処相無者。以業有優劣不同。
467 故得報土同処。而不相関者。未審同是善業。得土相関不。　答曰。相関。　又問。阿鼻獄
468 人。業既同悪。亦応相関。何故身不相関也。　答曰。以悪同是極重。故報不相関也。浄土
469 雖同是善得。未能極善。若如諸仏同。是極善無相。故無隔也。　又問。若諸仏同。是極善
470 無相。故無隔者。阿鼻獄人。亦同是極悪重相。弥応相関也。　答曰。阿鼻以是極悪。故
471 得報無隔苦之地。故身不相関。若身相障関。則有所隔。若有所隔。便身受苦不
472 扁。故経*云。「上火徹下。下火徹上」四方交通。同一苦具。無量罪人。身皆遍満火城。同受
473 此苦。政由悪極故也。　**祇洹寺恵令問曰**。義云。業有精麁。報有浄穢。因既有殊咸理
474 隔。故得二土同処。而匡相無。業有精麁。土有浄穢。誠如来旨。但土是質礙。如何同処。而
475 両得相容。　答曰。土雖質礙。本礙於所礙。然我彼業。彼之報土。於我為無。彼無我業。
476 我之報土。於彼為無。故得同処。而両不相礙也。　又問。業殊報異無所簡。然但雖於人
477 為隔。而即事有両。既云有両。豈得同処也。　答曰。有本在我。不関於彼。若不関於

478 彼。則於彼不有。彼有於我。亦為不有。故得同処。而両不渉也。　又問。二土相無。其義
479 已顕。未知勝者。能兼見穢土与不。　答曰。徳行未深。不能並見。高勝大士。乃能並照。二
480 土同処耳。　又問。若勝而能並照者。則応見浄穢相浄。美悪雑乱。何如可分別也。
481 答曰。当知其相而見。雖同一処。体相自分也。**龍光寺恵生問曰**。如来応土。是万行
482 所招也。　答曰。若論因果相対。咸名趙於至霊。応現無方。是往知之能也。　又問。尋応
483 則必繋於極智。何故弁因果相名之理。但言咸本而不及末也。　答曰。善感本心。感於
484 霊極。霊極既円。則能靡不応。応由機感。感自物興。所以迹之末。繋在於物。非我因所感也。
485 又問。若応物之迹。繋於彼者。諸以譬申。如木有火*因。人燧而発。木為正因。人燧為縁。可
486 得火生於人燧。不在於木也。　答曰。火雖由木而生。火与木異。物感本見迹。更無別
487 迹。迹由感而現。故繋在於物也。**冶城寺光泰問曰**。向釈咸土之行。皆由順化。順化之善。
488 有厚有薄。深浅不同。有三階之別。厚則感浄。薄則招穢。穢浄行異聞於前。然未識
489 浄穢名義。従何取判。　答曰。土以安身為義。安身之処。精麁両別。精則七珍厳麗。
490 麁則荊棘沙石。鄙妙相形。則浄穢名至。　又問。夫浄穢相殊。若苦楽相乖。苦楽不
491 可用。由悪咸浄穢。何以倶籍苦因。　答曰。苦楽既是正報。故其因則別。浄穢是依報。
492 依報是資身之具。故皆由善得。以善有勝負。故得浄穢耳。　又問。正報依報。理本
493 相関。正既是依家之正。依即正家之依。正既善悪因異。依報云何同善。　答曰。依正二

報。非不相関。但云正報苦楽。体相縣殊。体相縣殊。所以不得同因。依報二土。俱能安身。能安
身義同。所以同由善感。但善有優劣。故致土有浄穢耳。　又問。若浄穢不由善悪
致別。但善有優劣。故因劣善報為穢者。苦楽亦応尓。俱由善感。善有優劣。故
因劣善報為苦耳。　答曰。不然。苦楽既有。違順之乖。故知苦非劣善所得。浄穢
並能安身。所以其因不異。　又問。夫安身乃是。出家之通義。固無俟於善。苦楽有領
受之義。亦無当於善悪也。受義既無当於善悪。安義何独俟於善也。　答曰。此安是順
安之安。有寧身之義。不通於危苦之地。所以不同於受也。　又問。経云。「心浄土浄」。心穢土穢悪。
云何順安於身。　答。非不安身。従形浄為穢耳。　又問。若相形為浄穢。同能安身者。如地獄之
中。云何順安於身。而有為善之所感也。　答曰。今之所言浄穢土者。拠仏土為論耳。　又問。何
謂仏土不当。以仏統化之処。謂為仏土也。　答曰。土取安身之土。安身之土。由稟行仏化。脩得此土。
土由仏化而得。又斉応其中。故謂之為仏土。地獄是厄苦之処。非安身之宅。斯由背化所招。故非
仏土也。　又問。三千大三。上至阿迦尼咤天。下至阿鼻獄地。皆是仏之所統。若是仏之所統。即為
仏土。何必正是。善所得之処。謂為仏土也。　答曰。経此説統大化道。可被之処。不論此処
皆是善之所感也。　◇**白馬僧宗法師解浄土義**。夫神所託者為身。身所栖者為土。
土之与身。並是衆生果報。報之浄穢。由其因有勝劣。劣因則感彼石沙。勝因則報七珍。七
珍之報。称為浄土也。而此七珍。亦有不同。若与彼沙石。不相免離。此雑会之果。猶為穢境。

510 若如冨*楼那国。永絶四趣。無復沙石。純好不雑。乃為浄土也。致此浄土。必由善行。善行之要。
511 莫過十善。善能得土。故即善説土。経*云「十善是菩薩浄土」斯其文也。推其脩善之由。則
512 功在聖人。故此衆生浄国。亦謂仏土。　**南澗恵隆問曰**。七珍之比沙石。実是云浄。何以謂之穢也。
513 答曰。相形之境。未臻浄極。故猶為穢。　又問。冨楼那国。比此穢故。謂彼為浄。亦未面相形。何得
514 以為浄土乎。　答曰。本謂一仏所統。浄穢不相雑。而相形者耳。冨楼那国。純浄不雑。何得
515 階同他土。共為一穢也。　**中興僧鍾問曰**。若以仏所統。故同為穢国者。経*云「我浄土不毀」則此
516 土亦継在釈迦。便応与娑婆国為穢国。何得謂之浄也。　答*曰。雖同一統。而其域本殊。殊
517 故為浄。不得同此為穢也。　又問。三途在下。人天居上。界域本殊。而謂為同。沙石之与
518 七珍。実自共所反。謂異域何也。　答曰。果報殊故。雖同而異*。果報共者。雖異而同。今三途
519 之与人天共報。此土何得。不同為穢国。　又問。日月星辰。可謂共報。鑊湯之於天宮。曾
520 不相関。何得共報也。　答曰。此其果異者也。至於火宅。既起均於焚均。豈非果報同故也。
521 問曰。若為三災所及。以験其同報。故通為穢土者。四禅以上。超彼衆災。応是浄国。　答曰。向指
522 拠患所及者耳。四禅以上。雖患所不及。而同為一土。則宜猶是穢境。　又問。若以同一土。故浄
523 従穢為名者。何不以同一土。故穢従浄為名也。　答曰。不可皆類也。其猶浄地有草。故謂地
524 為穢。復可以草木。有浄地乎。草為浄地也。　**謝寺僧最問曰**。冨楼那国。亦有三界乎。
525 答曰。亦有。　又問。彼土既超此穢国。則過人天。何以猶有。人天之名也。　答曰。因順余方。故謂有耳。

義記第四　**天安僧鍾法師解金剛心義**　**上定林僧柔法師解金剛心義**　**靈曜**

僧盛法師解六通義　**下上定林法師解**　**上定林僧鍾法師解二諦義**　**◇天安僧鍾法師**

解金剛心義。　夫金剛心者。蓋是十地之終極。窮学之明解也。将顕之有摧累之功。故寄金剛。為其名也。此心者体有進求。謂之為学。性是知慮。名之為心。在境不乱。称之為定。有所決了。亦謂之智。既是窮学之照。超則符理。以奥理塡符。故能知貴之。有感種智。尽累之功。故取金剛。能摧之義。寄目其体。為金剛心也。**南澗恵隆問曰。**金剛為理。必以能摧為義。而言有闇未尽。仏智方除者。便是有所未摧。何得謂之為金剛也。　答曰。雖有闇未尽。而是除累。故得為能摧也。　又問。若除其所断。為金剛者。則金剛前心。亦有所断。亦応復為金剛乎。　答曰。此心是除累之極。得名金剛。前心在学未極。豈得同其称哉。　又問。若以窮累之極。得為金剛者。則種智始。是万累都尽。何不以種智為金剛。乃以学心為金剛也。　答曰。『敬如来問経』云。金剛心者。豈非以種智為金剛也。今但欲美窮学之心。種智非復是学。故不明之也。**靈基曇纖問曰。**若云金剛塡与理符。便応与理相称。不応有闇也。而猶有闇者。豈得謂之与理而塡也。　答曰。所言塡者。尽是此心之分野耳。未是塡極也。　又問。若未是窮塡之極。無以相代也。今此心之闇為正。此心而已。復有種類也。　答曰。此心既為大明之因。必生種智。無復起理。故不得復有種類也。　又問。若此心以種智必生。便無種類者。則金剛前心。亦必感金剛。

542 亦応無種類也。　答曰。金剛力感種智。故必無起理。金剛前心。既不感種智。故容有
543 種類也。　又問。若金剛必感種智。則金剛前心。亦必生金剛。便応倶無種類也。而
544 今云。前心容有起理。故言有者。亦可不生余心。容能乱生余心于。　答曰。必生金剛。
545 不生余心。豈得為乱也。　問曰。夫因満則果円。果満則因極。若金剛有闇未尽。便是
546 因理未極也。若因理未極。何得用未極之明。而感円明之果乎。　**奉答曰。**金剛解雖未円
547 極。而是隣極之解。解与極隣。故雖闇而能感。以因未及果。故得有闇明之殊也。　又問。金剛
548 有闇未尽。而要以種智除之者。種智将不有累于。何者経*言。「法身無為。不堕衆数」。若猶求照。
549 以断惑者。便是有作有為。豈得謂之無為。　答曰。智人之心。如鏡照而無功者也。斯則円
550 明自起。累自被亡。於我何常有為。我無功而累遣。故聖何得。而非無為乎。　**天安僧表問**
551 曰。若窮学之心是金剛。種智亦是金剛。欲顕学心。摧累之功。但就学心明之。而不明無学
552 為金剛。今窮学之心。有種別之智。大覚之照。種別之鑑。亦可以学心為種智。不以仏心為種
553 智乎。　答曰。経*中説「学心是金剛」亦言仏智是金剛。不言仏心是種智。学心亦是種智。既無
554 両説。何得以之為難也。　又問。若種智無両説。故不得明。学心為種智者。経*中明。金剛是般
555 若。仏心亦是般若。此有両説。亦応唯明学心為般若。不得以仏心為般若也。　答曰。般若解
556 之通名。故処処皆得。種智不尓。豈得同哉。　**◇上定林寺僧柔法師解金剛心義。**　夫聖解
557 虚微。渉用難弁。故寄之近事。以彰其美。金剛者為物堅。説能不摧故借譬。菩薩最後

学心。治惑之功也。大判所治之惑。不出二途。一則縁障。二為転障。就金剛前心。所成就惑。凡
有三品。明之所除則拭縁。明所不及則彼所転。感生金剛。則為転障。以此推類。余心可知。及
金剛生時。雖成就此惑。而能有力。感起種智。使此微惑。於種智現時。不復成就。故得種智。
於無累中起。是則二力相続。治此微障。就断因縁中説金剛。断最後惑也。**常楽恵**
珍問曰。金剛起時。窮学明満。道力所除。為一時頓尽。更有余也。　答曰。金剛起時。能使
惑力不縛。故得無碍道尽也。　又問。経*云。双道滅結無閡者。以去惑為能。若解生惑猶
成就。何得称為無閡。豈唯不得尽名。亦応障生明解。答曰。無閡生時能使惑力。惑力不得不伝。故能感大明。大明
於無累中起。故称解脱道也。　又問。若無閡起時。猶有閡者。無閡便是。於後念中得
号。便成因中説果。若尓可以無閡為解脱。不倶是因中説果故。　答曰。無閡以治閡受名。
解脱於無累得称。功用両別。豈得同因中説果哉。**治城智順問曰**。若微惑力劣。不能転
金剛。集於苦果者。則金剛力強。亦不応為障。云何許微惑。能障金剛。而不転之集苦也。
答曰。為障則有余。転之則不足。何以然也。金剛前心。為解既劣。故此惑能転。金剛之解。為力既
強。故不能転也。但以金剛起時。猶有此惑。寧得而不障哉。　問曰。金剛体解力是一。無有二用。云
何此解。於惑能転則有力。於障独無功。　答曰。金剛是一念。一念是実法。豈得有功。於此惑
也。倶以体能咸種智。相続中有力耳。豈可就一念之中。責之治惑之功也。　又問。金剛心時。有惑不也。
若解時無惑。則不得無功。若解時有惑。則解不滅惑。不治道也。　答曰。言解時有者。乃是

成就過去未来。不並有也。　又問。若成就過去未来為有者。則未解時有。或解時亦有之。既
二時俱有。云何以此解。為治道也。　答曰。故是相続中。得有治惑力。非解生時也。**冶城智秀**
問曰。実法道中。無有能断可断也。　答曰。如是。　又問。若実法之中。不弁有能断之功。就仮
名相続。説有功者。無閡解脱。亦就相続仮名。説為無閡。為解脱也。　答曰。如是。
又問。若無閡解脱。亦就相続説者。何故名金剛為無閡。種智為解脱也。　答曰。此就無閡
因縁中。説名無閡。解脱因縁中。説為脱也。　又問。無閡道力。解脱道力。其功各異不。　答
曰。亦得言異。　又問。若実法無有能断之功者。就仮名断中可到。指金剛心。為無閡道。
断惑使後。不復成就不。　答曰。尋惑不続。功由於金剛。金剛一念。得為無碍道也。
又問。若後不成就。功由於金剛。金剛一念。有能断功者。此即是実法。有断之力。那得云実法
無有能断之力也。　答曰。本不云実法。無如此之力。正無同世相断。彼去我留之義。謂之
為無耳。　**靈曜僧盛問曰**。解云。金剛苦而不集。金剛前心。念亦苦亦集。二心俱未免惑。何
故前心独是苦集。而後心唯苦非集也。　答曰。金剛前心。成就二品無照。是所対治者。但障
而不能転。已令集非対治者。能障其体。復能転其為集也。　又問。若金剛起時。猶有累
惑。何故不転此心也。　答曰。尓時雖成就微惑。即能為治道。正対治此惑。雖云是障。故不
能転也。　又問。二品無明。同有障力。何故不同転也。　答曰。以能治彼一品。故雖障而無転力也。
又問。若以所対治者重。而不能転。所不対治者軽。何以反能転也。　答曰。雖重而力弱。彼雖

590 軽而力強。所以能為転也。　又問云。是重不応称軽。　答曰。経云。「下下智能断上上惑」。**霊曜**
591 **恵令問曰**。解云。金剛苦而非集。前念亦苦亦集。集義為是。以明能集。以闇能集也。　答曰。以闇為
592 能集。明是道義。散而非集。　又問。若明是道。散而非集者。亦有相生義不。　答曰。以明理未足。更
593 生勝明也。　又問。明理未足。更生勝明者。為帯累能生。為直明能生也。　答曰。雖帯累能生。
594 不以累能生明也。　又問。所生明体。是苦不也。　答曰。既未免累。何得非苦。　又問。明体既是苦。不
595 異明而有体。既是不異明而有体。既従前明生。前明応集非也。　答曰。雖不異明而体。体
596 義非明義。故能生後明。而非集也。　又問。既言能生。云何非集也。　答曰。前明以帯累。故能生後
597 明。後明能由帯累明生。所以後明是苦。是為苦従累生。故明非集也。　**冶城光泰問曰**。所言帯累
598 者。即是惑累之累也。　答曰。然。　又問。既是惑累之累。而言帯者。是為異体。未相免出。故言帯也。為
599 是同体。而有帯也。　答曰。凡無漏道心。未免感障者。皆有二種累也。一者異体。二者同体。　又問。何者
600 同体。何者異体。　答曰。異体者。凡夫先曾起惑。成就過去。難障道心。使明不通了。是異体
601 障。同体者。即此彼障道心。有所不了。即是同体障。　又問。夫解惑理殊。明闇性別。異体相障。
602 義則可推。但以了同体。云何相障。同則一矣。理無乖二。何得解惑違。亦而一念一体也。
603 答曰。解従累生。未免於惑。故為惑所障。即為不了。　又問。若為彼所障。有所不了。是為不了。由
604 于彼障。使明理不広耳。豈応由彼障。故使此自体。自有不了之惑。又自障其了也。　答曰。既
605 為彼所障。有所不知。不知即惑。惑則道心。是為彼障。道心即有解有惑。豈得唯有彼障。此

606 唯解也。　問曰。夫理微難弁。請就譬申。如壁障眼識。不見外物。是為不見之由。但由彼壁。豈得

607 由壁障眼。翻自障其明也。　答曰。事有易難。譬有顕昧。当挙顕譬。以相喩也。如昼日麗天。

608 見通近遠。若重雲隔日。則下同晦明嘱之。目則唯能見近。不能嘱遠。見則為明。不見為

609 闇。是為能見之眼。有明有闇。既即乎一眼。以此而推。解惑同心。理自可知。　又問。譬雖周美。但

610 験之見。事猶未即心。如水火不可同体。黒白非一質。而解惑相乖。同在一心。猶所未喩。　答曰。如眼

611 生霄翳。所見不明不当。即此眼体。有明有障也。　又問。若霄翳覆眼。固翳自眼上。眼非翳

612 体也。　答曰。譬取少分要自通。名此翳都為翳眼。　又問。若解惑必其一体。則応始終。但一

613 存亡。必並請問。此惑為断。以不如其断者。則応解亦倶去。如其惑去。解留固非一体也。　答曰。解心

614 嘆障。以過去惑為本。譬由色有影。除色則影滅。影滅故大明存矣。　◇**靈曜僧盛法師解六**

615 **通義**。　夫六通者。蓋是聖人化物之要用。列其数也。一曰天眼。二曰天耳。三曰如意。四曰他心。五曰

616 宿命。六称漏尽。所以脩天眼通者。為欲遠観諸仏。発其恭敬之情。又為見十方衆生。起其

617 慈悲救物之意。故脩天眼。感得清浄妙色。而能徹覩障外。謂為天眼通也。雖復徹覩諸

618 仏。見衆生之身。若不聞諸仏説法。於己為益蓋微。若不聞衆生語言。於化有隔。故次脩

619 天耳通。能遠聞諸仏説法。聞十方衆生。口業音教也。為欲親近諸仏。又衆生自有宜。須形

620 到而受化。種種転変。而入道者。故次脩如意神通。若論昔所未得。今皆称心。六通莫往

621 非如意。但此通転境。従心之義顕。故偏受其名也。経*中有云「身通」。蓋是随義一而受称。色者

仮名為身。於色能有転変。自在之智。故得身通之乎。然其名雖殊。其体無異也。雖復見形聞
声。飛身到彼。若不知物心所宜。為化無益。故次脩他心通。能知衆生心念所宜。衆生心念
既不同。皆縁宿殖。深浅有殊。若不達其過去之住因。於化亦有壅。故次脩宿命通也。此過去所
知。條流万品。何以偏言知。宿命者。逐其長義也。何者如人身在欲界。脩得滅尽定。能暫
滅現在相続心。此人便有色人無心。無色界人有心。而無色心色。迭互有無。然衆生果報。総
持人命未曾無。故就知宿命以受名。第六漏尽。漏尽者。就除患以得称。若其有累於事。
則有礙。故第六以遣患為能。大判六通。制名不同。天眼天耳。就根以受名。身通以転変功
用。而立其号。他心逐境。照現在心以制称。宿命亦随境。而用知過去以顕目。漏尽是除遣
中立名。天眼根識。乃見現在。以籍色知未来法未顕。知未来法未顕甚幽微。而聖智能達於幽
微不異。灼然之在眼故。故天眼通。総以知未来。智合為通也。何以知其然也。『大品』*及『菩薩地**
持』並云。「天眼見衆生」。三業成就。此具明証也。**天安智蔵問曰**。弁六通名義。唯各有主。
然如意是総名。而身通独受号。云以義顕者為是。事多於余通。故言顕為是。於彼顕
灼。故称顕也。　答曰。非事多余通。亦非於他見為顕也。正以於色中。自在能転境従心。故如意
之名顕也。　問曰。若以転境従心名如意。義便余通所無有。則身通為如意。非受総名。
若尓唯応。転水為蘇酪。如此等事是如意。則直弁十方。非如意所摂也。　答曰。諸通十
方。皆有如意義。但此通顕。故受其総名也。　問曰。今以別顕。故受総名為是。合総別

638 両義為如意為是。以別示総。故以総為如意也。　答曰。並是。如意義両取。以為名也。　問曰。
639 若以両義。名如意者。余通所無有。則如此之如意非総也。　答曰。今制如意之名。具二義
640 者。居然独在如意通。若取称心為名者。余通皆有此如意義。今欲別五通之名異。故
641 随義受別名也。　問曰。若従顕受総名者。則通達無生。明解仏性等。皆先不了而今了。
642 亦在如意通摂乎。　答曰。如意神通制名。本在飛行転変。不就知境。　**荘厳恵澗問曰。**
643 解云。所以脩諸神通。将為自利利人。利人之方。必須明識三世。何故但立宿命。而不得標。未来通
644 也。　答曰。天眼通以智根為体。未来法是智所知。故不別立。未来通名也。　又問。天眼本以見色
645 為功。何故見未来。而受天眼之名也。　答曰。未来法幽隠難知。籍色能知。猶如眼見。故就天
646 眼受名也。　又問。夫色麁而心細。鑑麁易。照細難。若未来幽隠難知者。政応籍他心知之。焉得
647 摂在。天眼通也。　答曰。夫法相不同。自有籍麁以求妙。或乗妙而照麁。今政以色道麁顕。故
648 因之以知未来心。道塡漠別。制他心一通。豈得以知未来。而摂在他心通也。　又問。若以籍色知
649 未来。何故不籍色知過去也。　答曰。未来塡眺。未障其相難知。過去曾有易知。故不仮籍色
650 也。　**冶城智順問曰。**夫称命者。為是色心相続不断。　答曰。然。　又問。若色心不断為命者。入滅
651 尽定之人。亦有命也。　答曰。既云衆生。豈得無命。　又問。若入滅尽定有命。此則但色陰。成
652 衆生也。　答曰。現在雖無有心。成就心故。非但以色陰為衆生也。　又問。若不但以色為衆生
653 者。向解宿通。何故云入滅定衆生。但色無心。而得有命也。　答曰。衆生一期。果報相続。名之為

命。入滅定衆生。現在無心。而果報未断。故称有命。成就心故。不得不無。然不断故。論*云。「現在
雖無識得在故」。**冶城智秀問曰**。今名衆生者。為但因色為衆生。成就心為衆生也。
答曰。此色成就心。名為衆生也。　又問。若成就心。名衆生者。何得称云。有色而無心也。
答曰。現在心識暫滅。色恒相続。此豈得非有色而無心也。　又問。現在無心。得称為衆生也。
答曰。得名衆生。　又問。若但色名衆生者。与木石無異者。木石之類。応為衆生也。　答曰。
不然。現在乃暫無心識。以成就故。不得於無。豈得同乎。木石無心識也。　◇**上定林僧柔法師解二**
諦義。　夫二諦者。生於相待。万法虚仮。因縁而有。仮有非真。称之為俗。仮無非為。謂之
為真。二理審実。目之為諦。　**安楽悳令問曰**。俗諦之有。為在無外。為在無中也。　答曰。第
一義無。豈容無中有有。　又問。若無中有。便有在無外。　答曰。経*云「無有一法出法性者」何
得問言。有在無外也。　又問。若有不出法性者。即是無中有有。何得言無中無有。　答曰。
云不出法性者。一切法以無為性。故言不出。非是無中有有也。　**皇興道明問曰**。有為体無。
有義無也。　答曰。夫義者。此体之義。既云体無義。豈得有哉。　又問。若体義俱無。則唯
真無俗。　答曰。法本自無。不懐有為。無無非懐。有何曾無俗。　又問。本以為俗。既言無有。
安得非懐也。　答曰。以宿縁尋仮。仮未曾有。以縁合有。求仮未曾無。仮未曾無。俗諦常存。
靈味宝亮問曰。若以衆縁求仮。仮可不有。而衆縁不無也。　答曰。以理求縁。縁不異無。
又問。云何不異。　答曰。法不自有。従縁而有。有既従縁。故雖有而不有。　又問。云雖有而不

670 有。有便是本来未曾有。若本来未曾有。則無中無有無有。若無中無有有。亦有中無有無。是
671 則互無也。　答曰。即有而不有。非異有而有無。非異有而有無。豈是互無哉。**冶城智秀問曰。**
672 言空有有空者。緣諸法仮故。若以仮不可得。則是有成於空。空是無法。云何能成於有。　答曰。
673 云空有有空者。正明万法仮不可得。故言有空。不云空有相成也。　又問。法師所明。便是不許相
674 成。以義而推。理不応尓。何以知之。尋明空必由弁有不可得。斯理乃彰。云何有法。不成空義也。
675 答曰。責相成者。時理有不然。何以知之。唯託有明無。故言有空。此有本来自無。既本来自無。誰成
676 無也。　又問。若言本来自無。云何析観以求無。若析観以求無。則知即是此有無非本。別有此
677 無也。　答曰。以析観求無。則明本来無。来無未始而不終。就衆未曾一非。本無如何。**中寺興慶問**
678 **曰。**若法以無為性者。法之無自。可以無為性。今云法体無。云何用無為性也。　答曰。無自為性者。
679 此存而不論。今明体無為性也。　又問。若法以無体為性者。既云無体。誰有性也。　答曰。就
680 有以明体。故得以無為性。　又問。若就有以所無。此無非有無。　答曰。既就有以所無。即所此
681 有無也。　**瓦官僧賜問曰。**云二諦相待。相待為是正有其名。為相待有其法也。　答曰。
682 相待有法。亦相待而有名。　又問。若第一義相待而有者。経*云。観第一義得道。便是相
683 待而得道也。　答曰。遣有故説無。謂之為仮。無求為本。不有無有。豈有無無。無無可会。
684 故仮称為会無。　問曰。云二諦生於相待。真諦亦是仮不。　答曰。既許相待。豈得非仮。　又問。
685 若是仮者。亦応是俗。何以謂之為真。　答曰。唯皆是俗。而就相待中。有精有麁。麁則仮為。

686 仮為故称俗。無則無仮為。対為故称真也。　又問。相待之無。与相待為一為異。　答曰。既曰
687 仮無。可得言異。　又問。云何為異。　答曰。就仮得為異。離仮無可異。　又問。若就仮可為
688 異者。異則無不異。　答曰。若責定有仮定。則不名仮。仮法無定性対有。故成仮有。本畢竟
689 無。無対何有仮。就仮謂之異。無仮無定異。　**冶城光泰問曰**。云二諦生相待。尋相待之義。
690 則有彼此之別。既有彼此。既有彼此之別。理不可一。而経*云「色即是空。空即是色」為欲亡二。而相
691 即為。猶存二而可即。　答曰。既是相待。便有非定有。無非定無。未達言旨者。尋名取相。而
692 執有謂定有。執無謂定無。則情倒相待之有無。既翻理成倒非理。無以遣其惑情。今明仮有
693 不有。則反其迷有之心。仮有既無。誰異於無。故言「色即是空」仮無亦無。則翻其乖無之懐。仮
694 無既無。誰異於有。故云「空即是色」理既若此。豈得存両。而遣惑也。　又問。尋釈相即之旨。政
695 以物迷空有。謂為定空。空有故所以。即理以遣情。今空有既仮。而謂之為定実。政応明仮
696 以遣実。何故就両亡。而遣実也。　答曰。衆生本執仮以為実。若不発仮。則有情還生。故
697 応両亡以遣実。　又問。若物執執仮。故就空有相。即寄両亡。以遣滞者。凡即定為義。是
698 相同之謂。向言「色即是空」明無色可以異空。若無色可以異空。竟誰与空同。無色可同空
699 者。経何以言「色即是空」也。又「空即是色」亦言無空可以異色。亦誰同於色。何得順経。言空
700 即色也。　答曰。若存空存色。空色義殊。理不可即。政以空色並之。之義無二。所以相即耳。経
701 所以以色即空。以空即色者。空色是物之所執。故就其所執。明無可相異。所以遣其滞也。

702 義記巻第五　**天安僧表法師解四諦義　冶城智秀法師解四諦義　天安僧鍾法師**

703 **解三乗同観義　謝寺僧最法師解三乗同観義　◇天安僧表法師解四諦義。**四諦。所以

704 称之為諦者。審実義也。苦集滅道四理。審実名之為諦。是以経*言。「一受不退常寂然」

705 良由理実故尓。若以審為諦。則万法当相。無非審実。今就衆実之中。偏挙其要。故

706 但説四也。此四之中。苦集是世間因果。滅道是出世間因果。政欲令人深厭苦集。脩道出

707 滅。故明二種因果也。苦者以逼迫為義。一切心行起則託境。境所催逼不得起故。以催

708 逼為苦義也。若以催逼為苦。則無心非苦。但三受覚知苦楽。其相顕著故。以三

709 受為苦諦也。集者聚集為趣。業与煩悩。能聚集有漏苦報。名為集諦也。滅諦者。

710 苦尽為義也。苦由集得。断集則苦亡。故以苦集尽処無為。名為滅諦也。道諦者。道有

711 二義也。一言能除。二至非品。今取能除為道義也。何以然之。集不自滅。由道能除。無漏心

712 能除惑出滅。故以無漏為道諦也。　**天安僧鍾問曰。**若以受陰為苦諦者。識想二心。

713 是苦諦不也。　答曰。四諦是局明義。故不取識想也。　又問。若局断便不取者。則四諦所

714 不摂也。　答曰。炎明則是苦諦。局断弁義。則不取也。　又問。若識想四諦所不摂者。便応

715 〕□□□

註

録文は写本にある訂正に従って文字の挿入・削除・置き換えをしている。解義、人物名を含む部分をゴシック体とした。

005 「共在一経」＝『大般涅槃経』など。「生因」「了因」を説く。

013 「如瞿師羅」＝北涼曇無讖訳（421年）『大般涅槃経』（南本）巻第二十　大正蔵12-738-b18「為瞿師羅長者示三尺身故」

017 「智」と書くが「知」と録文する。また、「知」と書くを「智」と録文の場合もある。注記はしない。

030 「憂」と書くが「優」と録文する。

077 「経云」＝姚秦鳩摩羅什訳（406年）『維摩詰所説経』巻上　大正蔵14-538-a22「菩薩随所化衆生而取仏土」

085 「経云」＝『大般涅槃経集解』巻第一　大正蔵37-379-a10「案。智秀曰。斯蓋円極至徳之総名也。若備称旧本。応云摩訶般涅槃那」

090 「経云」＝（南本）『大般涅槃経』巻第十二　大正蔵12-624-c29「所言大者名之為常」

110 「間」は「澗」

111 「或」と書くが「惑」と録文する。「惑」と書いて「或」の場合もあるが注記はしない。

113 「不生不滅。常楽我浄」＝『南本』『大般涅槃経』巻第二十六　大正蔵12-774-a21「解脱涅槃常楽我浄不生不滅」

139 「鍾」は「表」の誤りか　207行では「表」とする。

150 「勉」と書くが「免」と録文する。以下注記はしない。

153 「経中言」＝姚秦鳩摩羅什訳（411年）『成実論』巻第七大正蔵32-289-c8「法名自体」

160 「論云」＝『成実論』巻第一　大正蔵32-239-b7「教化所説是名為法」

168 「代」か。

179 「竟」と見えるが「覚」

203 一字あき

205 一字あき　意味不明

216 『勝鬘経』云＝劉宋求那跋陀羅訳（436年）『勝鬘師子吼一乗大方便方広経』　大正蔵12-220-a16「如是無明住地縁無漏業因」

220 「経中何故云」＝姚秦鳩摩羅什訳（403年）『摩訶般若波羅蜜経』巻第七　大正蔵8-272-b18「於世間中不動不出」

221「経中何故復云」＝姚秦鳩摩羅什訳（408年）小品『般若波羅蜜経』巻第一　大正蔵 8-539-a21「是乗従三界出。住薩婆若」
230「経云」＝姚秦鳩摩羅什訳（402年）『坐禅三昧経』巻上　大正蔵 15-270-b26「説智及智処」
247「云」と書くが「運」
263『勝鬘経』所謂＝『勝鬘経』では「無明住地」はあるが「無明住地惑」とは言わない。
272十地の名称は仏駄跋陀羅訳（421年）『大方広仏華厳経』巻第二十三　大正蔵 9-542-c27「炎」は「焔」
289「経云」＝『成実論』巻第十一　大正蔵 32-324-b5「以下下智断上上煩悩」
295「桓」と書くが「洹」と録文する。以下註記はしない。
334「地経云」＝『大方広仏華厳経』巻第二十五・十地品　大正蔵 9-562-a2『譬如転輪聖王。乗大宝象。遊四天下。見諸衆生。貧窮困悩。王雖無苦。而未離人。若捨王身。生於梵世。遊千世界。現大威力。爾時乃名離於人身。」
353「経明」＝『大方広仏華厳経』巻第二十三　大正蔵 9-546-b28「菩薩摩訶薩。随順如是大慈悲法。以深妙心。住在初地」
410「経言」＝劉宋求那跋陀羅訳（元嘉年中424～453年）『過去現在因果経』巻第一　大正蔵 3-621-a9「持戒摂毀禁。忍辱摂瞋恚。精進摂懈怠。禅定摂乱意。智慧説愚癡」
414「経云」＝不明
420「熟」と書くが「就」
430「受」と書くが「愛」
436「栄」には赤点がつく「柔」の誤りか　338行参照
442「経云」＝姚秦鳩摩羅什訳（406年）『妙法蓮華経』巻第五　大正蔵 9-43-c6「大火所焼時　我此土安隠　天人常充満　園林諸堂閣　種種
宝荘厳　宝樹多花菓　衆生所遊楽　諸天撃天鼓　常作衆伎楽　雨曼陀羅花　散仏及大衆　我浄土不毀」
454「経云」＝北涼浮陀跋摩・道泰訳(439年)『阿毘曇毘婆沙論』巻第四十四　大正蔵 28-333-a29「得色界報」
457「不」か
472「経云」＝（南本）『大般涅槃経』巻第十七　大正蔵 12-723-b16、「上火徹下下火徹上」

485 「大」と書くが「火」

498 「土」と書くが「出」

500 「経云」＝『維摩詰所説経』巻上　大正蔵 14-538-c5「随其心浄則佛土浄」

510 「冨楼那国」＝仏弟子富楼那が建立する浄土。『妙法蓮華經』巻第四　大正蔵 9-27-c11～28-a7「諸比丘。楼那亦於七仏説法人中而得第一。今於我所説法人中亦為第一。於賢劫中当来諸仏。説法人中亦復第一。而皆護持助宣仏法。亦於未来。護持助宣無量無辺諸仏之法。教化饒益無量衆生。令立阿耨多羅三藐三菩提。為浄仏土故。常勤精進教化衆生。漸漸具足菩薩之道。過無量阿僧祇劫。当於此土。得阿耨多羅三藐三菩提。号曰法明如来。応供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。仏。世尊。其仏以恒河沙等三千大千世界為一仏土。七宝為地。地平如掌。無有山陵谿澗溝壑。七宝台観充満其中。諸天宮殿近処虚空。人天交接。両得相見。無諸悪道。亦無女人。一切衆生。皆以化生。無有婬欲。得大神通。身出光明。飛行自在。志念堅固。精進智慧。普皆金色。三十二相而自荘厳。其国衆生。常以二食。一者。法喜食。二者。禅悦食。有無量阿僧祇千万億那由他諸菩薩衆。得大神通。四無礙智。善能教化衆生之類。其声聞衆。算数校計所不能知。皆得具足六通。三明及八解脱。其仏国土有如是等無量功徳荘厳成就。劫名宝明。国名善浄。其仏寿命無量阿僧祇劫。法住甚久。仏滅度後。起七宝塔遍満其国。」

511 「経云」＝『維摩詰所説経』巻上　大正蔵 14-538-b23「十善是菩薩浄土」

515 「経云」＝『妙法蓮華経』巻第五　大正蔵 9-43-c12　422行の注

516 「又問」と書くが「答曰」

518 「異」脱字を補う。

527 「下上定林法師解」書き誤りか。

＊＊ 「鍾」は「柔」の誤りか　659行には「上定林僧柔法師解二諦義」がある。

536 『敬如来問経』＝現在に伝わっていない。

548 「経言」＝『維摩詰所説経』巻上　大正蔵 14-542-a17「佛身無為不堕諸数」

553 「経中説」＝曹魏代失三蔵名訳（220～265年）『阿毘曇甘露味論』巻一　大正蔵 28-973-b25「最後学心是金剛定」

554 「経中明」＝不明

563「経云」＝不明

590「経云」＝『成実論』巻十一　大正蔵 32-324-b5「以下下智断上上煩悩」

591「以」と書くも「為」

621「経中有云」＝『成実論』巻第十六　大正蔵 32-369-b11「六通者。身通天眼天耳他心智宿命漏尽」

631『大品』＝『摩訶般若波羅蜜経』巻第二　大正蔵 8-228-c18「天眼見衆生」

＊＊『菩薩地持』＝北涼曇無讖訳於姑蔵『菩薩地持経』巻第二　大正蔵 30-898-b19「諸仏菩薩。以天眼見乃至十方身之所作浄不浄色。見已方便随宜利益」

654「論云」＝『成実論』巻第二　大正蔵 32-251-a6「雖無現識識得在故」

662「経云」＝北魏菩提流支所撰『金剛仙論』巻第三　大正蔵 25-813-c23「大品経云。無有一法出法性者」　『摩訶般若波羅蜜経』巻第一　大正蔵 8-223-a1「不見有法出法性者」　（現行『摩訶般若経』の文句は、後世に変えられて伝わった可能性がある。）

682「経云」＝不明

690「経云」＝『摩訶般若波羅蜜経』巻第一　大正蔵 8-221-c1「色即是空。空即是色」

704「経言」＝『維摩詰所説経』巻上　大正蔵 14-537-c21「一受不退常寂然」